

厚真町

富里3遺跡

— 勇払東部(二期)地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成27年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

厚真町

富里3遺跡

— 勇払東部(二期)地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成27年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部の厚幌導水路工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが、平成27（2015）年度に厚真町で実施した富里3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は第2調査部第1調査課および第3調査課が担当した。
3. 整理作業の担当は、新家水奈・阿部明義・中山昭大である。
4. 現場および遺物の写真撮影は中山が行った。
5. 本書の執筆は村田・新家・阿部が行い、編集は新家が担当した。
6. 各種分析・同定は下記に委託した。
 - 放射性炭素¹⁴C年代測定：株式会社 加速器分析研究所
 - 炭化種実同定・漆塗膜分析：株式会社 パレオ・ラボ
7. 調査にあたっては、下記の諸機関および個人よりご指導、ご協力いただいた（順不同・敬称略）。
 - 北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
 - 厚真町教育委員会 乾 哲也、奈良智法、宮塚義人、宮崎美奈子、松井 昭、
山戸大知、高橋和樹
 - 苫小牧市教育委員会 赤石慎三
 - むかわ町教育委員会 田代雄介
 - 新ひだか町教育委員会
 - 新冠町教育委員会
 - 平取町教育委員会 森岡健治
 - 株式会社 加速器分析研究所 山田しょう
 - 株式会社 パレオ・ラボ 中村賢太郎
 - 株式会社 高橋建設
 - PUC 奥村敬三

記号等の説明

1. 遺構名は、層位（「Ⅰ」・「Ⅲ」・「Ⅴ」）と以下の記号の組み合わせによって表記し、発掘調査順に番号を付した。
「AS」：灰集中 「KP」：柱穴状小土坑・杭跡 「TP」：Tピット
2. 遺構図には方位記号を付した。発掘区の基線（北-南、数字のライン）は真北である。レベルは標高（単位m）を示す。図中の「+」は、5m方格のグリッドラインの交点で、傍らのアルファベット・アラビア数字が発掘区（グリッド）名である。断面図中の破線-----は、調査した土層の深さを示す。一点鎖線 - - - - - は攪乱を示す。
3. 遺構の規模は、「確認面での長軸×確認面での短軸／底面での長軸×底面での短軸／厚さ（深さ）」の順で示した。
4. 掲載した遺構図や遺物図等の縮尺は原則的に以下のとおりとした。また変則的なものについても随時スケールを入れている。
遺構実測図 1：40 柱穴状小土坑・杭跡（KP）・灰集中（AS）の断面図 1：20
漆碗塗膜出土詳細図 1：5 土器実測図・拓影図 1：3
剥片石器実測図 1：2 礫石器実測図 1：3 骨角器 1：1
5. 出土遺物分布図・断面図等の図中の遺物は、種類別に略記号やシンボルマークで示したことがある。
▲：剥片 ■：礫 ★：金属製品 ×：獣骨 ☆：炭化物 ○：陶磁器
6. 土層の混合状態を表現するために、以下のように表記してある。また、遺構の層位はアラビア数字で示した。
A+B：AとBが同量混じる A>B：AにBが少量混じる A≫B：AにBが微量混じる
7. 土層の色調には『新版標準土色帖』2004年版（小山・竹原 2004）を使用し、カラーチャートの番号を付したものがある。また、土層の記述には下記の記号・略称を用いた場合がある。
Ta-a：樽前aテフラ Ta-b：樽前bテフラ B-Tm：白頭山-苦小牧火山灰
Ta-c：樽前cテフラ Ta-d：樽前dテフラ
8. 遺構図中のゴチックアラビア数字は、遺物図や遺物写真右下の掲載番号と対応している。
石器等の計測値は、「長さ（最大長）×幅（最大幅）×厚さ（最大厚）、重さ」を記した。欠損しているものは現存長の数値を（丸括弧）でくくった。実測図中、敲打痕はV—Vで範囲を表した。
9. 遺物写真の縮尺は原則以下のとおりである。
土器 約1：3 剥片石器・石製品 約1：2 礫石器 約1：3 骨角器 約1：1
10. 時代・時期の呼称は「縄文時代（中期・後期・晩期）」、「アイヌ文化期」とした。

目 次

例言・記号等の説明

目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

I 諸言

- 1 調査要項…………… 1
- 2 調査体制…………… 1
- 3 調査にいたる経緯…………… 1
- 4 調査の方法…………… 4
 - (1) 発掘区の設定…………… 4
 - (2) 発掘調査の方法…………… 4
 - (3) 整理作業の方法…………… 4
- 5 遺物の分類…………… 5
 - (1) 土器等…………… 5
 - (2) 石器等…………… 5
 - (3) その他の遺物…………… 5
- 6 調査結果の概要…………… 6

II 遺跡の環境

- 1 遺跡の立地と環境…………… 7
 - (1) 位置と地名の由来…………… 7
 - (2) 遺跡周辺の地形・環境…………… 7
- 2 土層…………… 9
- 3 周辺の遺跡…………… 9

III 遺構と遺物

- 1 Ⅲ層の遺構と遺物…………… 13
 - (1) 遺構…………… 13
 - (2) 遺物…………… 15
- 2 V層の遺構と遺物…………… 16
 - (1) 遺構…………… 16
 - (2) 遺物…………… 16
- 3 I層の遺構と遺物…………… 21

IV 自然科学的分析

- 1 富里3遺跡における放射性炭素年代…………… 29
- 2 富里3遺跡から出土した炭化種実…………… 32
- 3 富里3遺跡出土漆器の塗膜分析…………… 35

V まとめ …… 39

- 1 縄文時代 (V層) …… 39
- 2 アイヌ文化期 (Ⅲ層) …… 39
- 3 I層…………… 39

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

I 諸言		
図 I - 1 遺跡の位置	2	
図 I - 2 発掘区設定図	3	
図 I - 3 遺構位置図	6	
II 遺跡の環境		
図 II - 1 遺跡の位置と周辺の地質	8	
図 II - 2 メインセクション	10	
図 II - 3 土層観察位置・トレンチセクション・基本土層柱状図	11	
図 II - 4 富里地区周辺の遺跡	12	
III 遺構と遺物		
図 III - 1 III層残存範囲と遺構・遺物位置図	13	
図 III - 2 灰集中・漆椀出土状況・III層出土遺物分布	14	
図 III - 3 V層旧河道範囲と遺構位置図	15	
図 III - 4 柱穴状小土坑 (V層)	17	
図 III - 5 Tピット	18	
図 III - 6 包含層(V層)出土の土器	20	
図 III - 7 包含層(V層)出土の石器 (1)	21	
図 III - 8 包含層(V層)出土の石器 (2)	22	
図 III - 9 I層遺構位置図	23	
図 III - 10 柱穴状小土坑 (I層) (1)	24	
図 III - 11 柱穴状小土坑 (I層) (2)	25	
IV 自然科学的分析		
図 IV - 1 暦年較正年代グラフ (参考)	31	
図 IV - 2 漆器塗膜の赤外分光スペクトル図	36	

表 目 次

I 諸言		
表 I - 1 検出遺構数一覧	6	
表 I - 2 出土遺物総点数	6	
III 遺構と遺物		
表 III - 1 検出遺構一覧	26	
表 III - 2 出土遺物点数一覧	26	
表 III - 3 フローテーション結果一覧	26	
表 III - 4 遺構出土骨角器一覧	27	
表 III - 5 包含層出土掲載土器一覧	27	
表 III - 6 包含層出土掲載石器一覧	28	
IV 自然科学的分析		
表 IV - 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	30	
表 IV - 2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)	31	
表 IV - 3 富里3遺跡から出土した炭化種実	33	
表 IV - 4 分析対象一覧	35	
表 IV - 5 生漆の赤外吸収位置とその強度	35	
表 IV - 6 赤色塗膜層、下地層のX線分析結果	36	
表 IV - 7 塗膜分析結果	36	

写真図版目次

IV 自然科学的分析

図版IV-1 富里3遺跡ⅢAS-1灰層から出土した炭化種実	34
図版IV-2 漆器の塗膜構造(a)と反射電子像(b)	37
図版IV-3 分析試料採取位置	37

写真図版

図版1

Ⅲ層上面 確認 西から
旧河道跡 完掘 南東から
Ⅴ層上面 確認 西から
完掘 西から

I KP-18 土層断面 南西から

I KP-19 土層断面 西から

I KP群 完掘 南西から

図版2

ⅢAS-1 土層断面 西から
Ⅲ層上面 漆椀 南から
Ⅲ層上面 柱穴(I KP) 確認 南から
遺跡周辺環境 南西から

図版5

I層上面 カワシンジユガイ 南から

TP-1 土層断面 南西から

TP-1 完掘 南西から

TP-1 KP-1

TP-1 KP-2・3 西から

TP-1 KP-1~3 完掘 北西から

VKP-1 土層断面 東から

VKP-2 土層断面 西から

V層遺物 東から

図版3

I KP-1 土層断面 南東から
I KP-2 土層断面 北東から
I KP-3 土層断面 南東から
I KP-4 土層断面 南東から
I KP-5 土層断面 南西から
I KP-6 土層断面 南西から
I KP-7 土層断面 東から
I KP-8 土層断面 南から
I KP-9 土層断面 南東から
I KP-10 土層断面 南から
I KP-11 土層断面 南西から
I KP-12 土層断面 南西から

図版6

V層遺物 北から

調査風景 南東から

基本土層 南東から

崖面土層 東から

図版4

I KP-13 土層断面 南西から
I KP-14 土層断面 南西から
I KP-15 土層断面 南西から
I KP-16 土層断面 南西から
I KP-17 土層断面 南西から

図版7

1. ⅢAS-1出土の骨角器

2. Ⅲ層出土の漆椀塗膜片

図版8

1. 包含層出土土器

図版9

1. 包含層出土石器(1)

2. 包含層出土石器(2)

I 諸言

1 調査要項

事業名 勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査
 事業委託者 国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
 事業受託者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
 遺跡名 富里3遺跡（北海道教育委員会登録番号：J-13-133）
 所在地 勇払郡厚真町字富里322-3・4・5、325-11
 調査期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日
 （現地調査期間 平成27年5月12日～6月12日）
 調査面積 303㎡

2 調査体制

理事長	坂本 均（～平成27年6月）	第2調査部	部長	三浦 正人
理事長	越田 賢一郎（平成27年7月～）	第1調査課	課長	中山 昭大（発掘担当者）
副理事長	中田 仁（平成27年7月～）	第3調査課	課長	村田 大（発掘担当者）
専務理事	中田 仁（～平成27年6月）		主査	新家 水奈（発掘担当者）
専務理事	山田 寿雄（平成27年7月～）		主査	阿部 明義
常務理事	長沼 孝（平成27年7月～）			

3 調査にいたる経緯

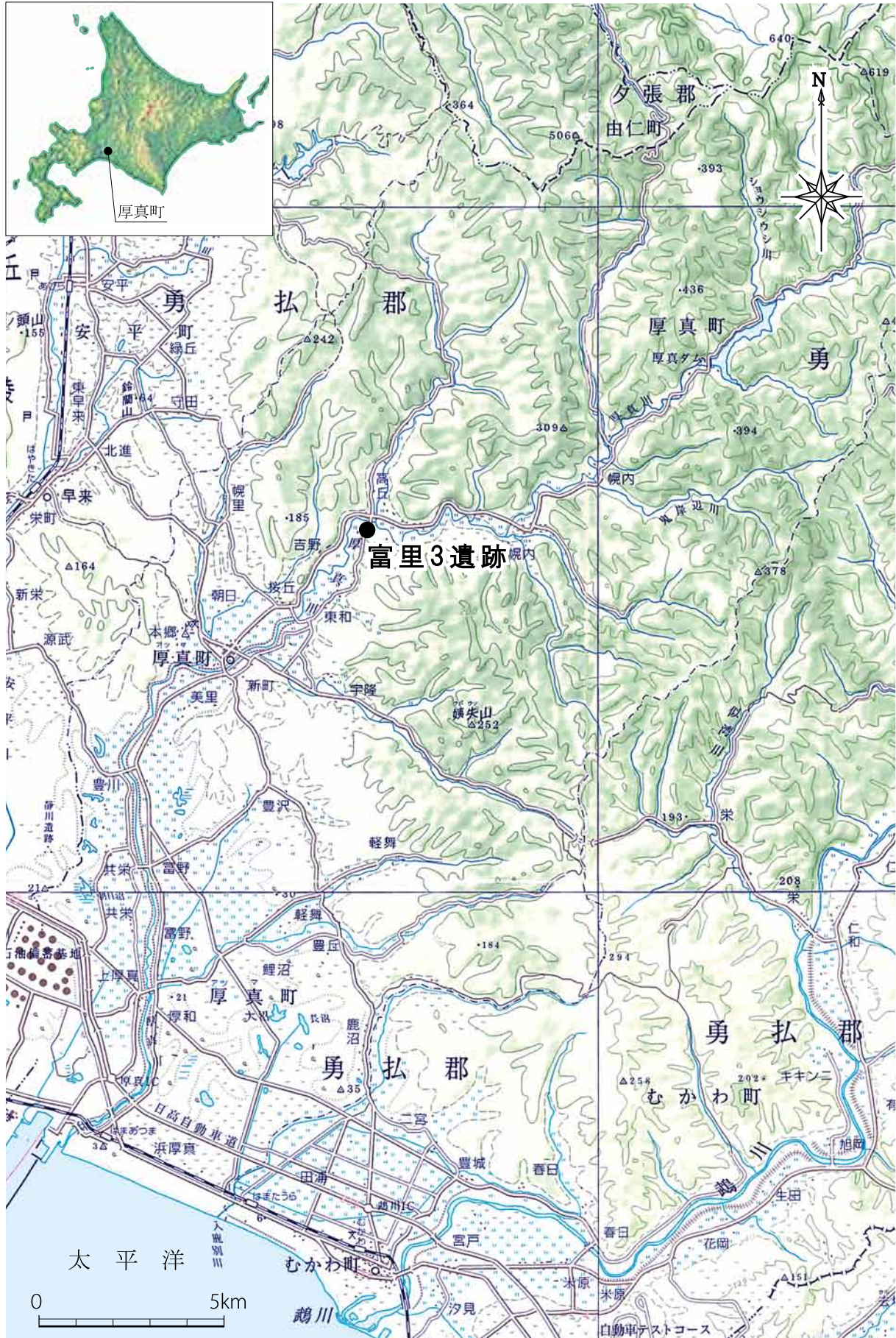
厚幌導水路事業は、安定的かつ効率的な農業用水の供給を目的として、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（以下、室蘭開建）が実施中の農業農村整備事業で、国営勇払東部（二期）土地改良事業の一つである。

事業は現在、北海道胆振総合振興局が推進中の厚幌ダム建設事業と連動し、厚幌ダムができる厚真町幌内地区から町南部の鯉沼地区までの総延長24.5kmに地下埋設導水管を敷設するもので、平成7年に北海道と厚真町の間で締結された「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」に含まれているものである。

厚幌導水路建設事業が具体化されるに伴い、平成15年10月に室蘭開建より北海道教育委員会（以下、道教委）へ埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。事業者からの早急な所在確認調査の実施要求を受けて、対象範囲について平成15年11月に厚真町教育委員会（以下、町教委）が所在確認調査を実施し、結果を道教委へ報告した。この報告を受けて道教委は平成15年12月、4か所で試掘調査が必要と事業者へ回答した。試掘調査は平成16年10月と平成17年4月に実施され、ニタツプナイ遺跡、幌内5遺跡、幌内6遺跡、幌内7遺跡について発掘調査が必要と提示された。

この後道教委は、導水路の本線および支線用水路の施工路線が確定次第、順次所在確認調査および試掘調査を実施している。発掘調査または遺構確認調査が必要とされた遺跡は、平成27年12月現在16遺跡で、面積の合計は約15,000㎡である。

発掘調査は平成19年度から町教委によって行われ、現在までニタツプナイ遺跡（平成19年調査）、厚幌1遺跡（平成20年調査）、幌内7遺跡（平成20年調査）、幌内5遺跡（平成21年調査）、富里2遺



※国土地理院発行20万分の1地勢図「夕張岳」「浦河」「札幌」「苫小牧」を使用
図 I - 1 遺跡の位置

跡（平成21年調査）の5遺跡で調査が行われ調査報告書が刊行されている。

また厚幌導水路建設事業が本格化するに伴い、平成25年度から（公財）北海道埋蔵文化財センターも発掘調査に参入することとなった。これまでに調査または調査中の遺跡は、厚幌1遺跡（平成25年、27年調査）、厚幌2遺跡（平成27年調査、28年継続実施予定）、オッココ1遺跡、幌内6遺跡、幌内7遺跡（いずれも平成27年調査）と今回報告する富里3遺跡の6遺跡である。

富里3遺跡の調査範囲は厚幌導水路の支線用水路で「4区用水路」にあたる。道教委は平成26年7月9日に、用水路敷設予定地周辺の約5haについて試掘調査を実施した。その結果、発掘を必要とする面積約250㎡（Ⅲ層、Ⅴ層とも）と要慎重工事の面積約1,700㎡が提示された。その後の協議などの結果、最終的な発掘を必要とする面積は303㎡となり、工事工程の都合から平成27年度に現地調査および報告書の刊行を行うこととなった。

なお、調査範囲の周辺は、昭和30年代までアイヌ民族による熊送りが実施されていたことや伝統的平地式住居であるチセも複数軒存在していたことなどが、町教委が刊行した厚幌導水路関連の調査報告書（厚真町 2009、2010）で指摘されている。このことから、調査着手前の準備工である重機による表土除去作業の立会はより慎重に行った。その結果、Ⅰ層（表土、耕作土など）で柱穴状の小土坑を複数確認した。Ⅰ層は調査の対象外であったが、この地域の歴史資料であると判断し、調査・記録することとした。（村田）

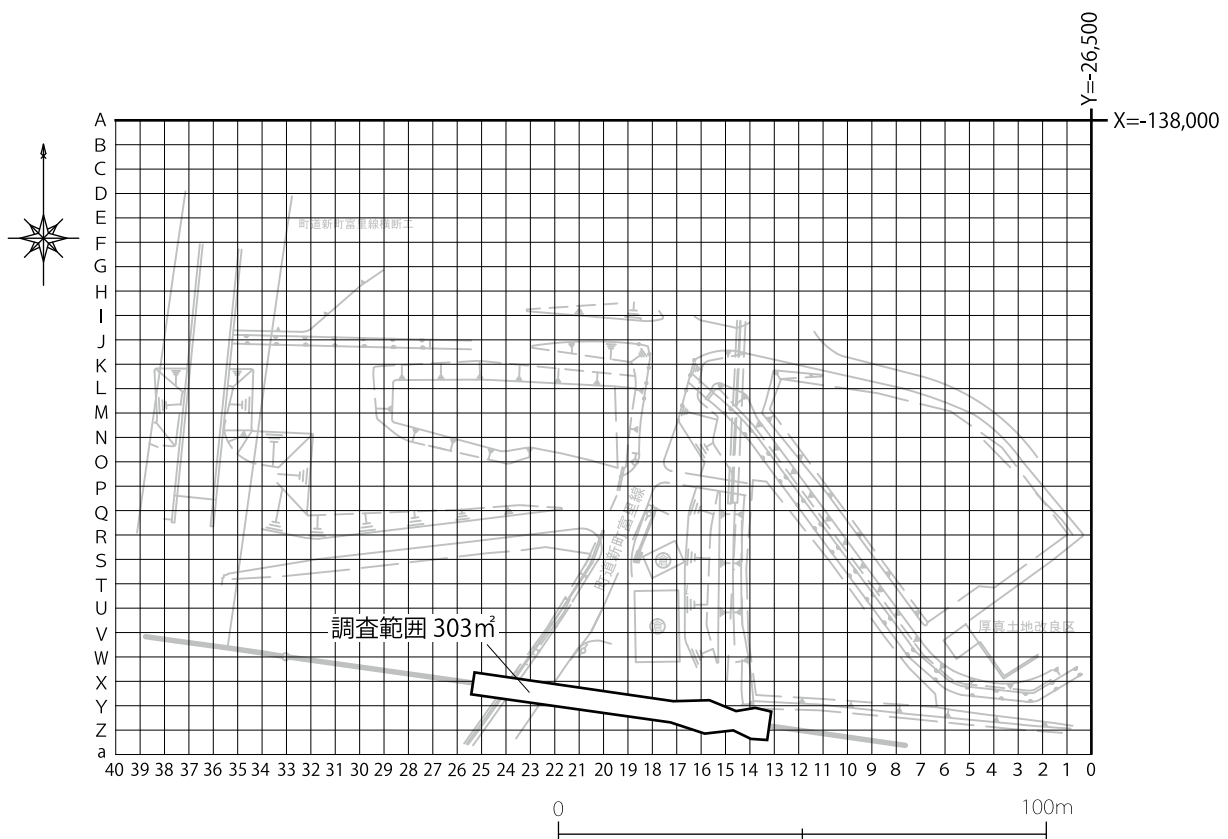


図 I-2 発掘区設定図

4 調査の方法

(1) 発掘区の設定

現地調査の基本図は、北海道開発局室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所の「勇払東部（二期）農業水利事業4区用水路建設工事 支線用水路平面図 1,000分の1」を使用した。

発掘区（グリッド）の基線には、世界測地系（平面直角座標XⅡ系）を使用した。X座標＝－138,000とY座標＝－26,500が交差した点を起点A・0（ゼロ）とし、南にB、C、D・・・、西に1、2、3・・・と5m幅で平行する線を設定した。調査区内のグリッド交点に杭を打設し、北東側の杭を個々のグリッドの呼称とした。呼称はアルファベットとアラビア数字の組み合わせによった（図Ⅰ－2）。

(2) 発掘調査の方法

調査区は前年に着手された工事区内に位置しており、工事の際に表土は除去されていた。その後確定した調査範囲を保護するため、立会した厚真町教育委員会により厚く火山灰を客土していた。調査ではまず客土を重機により除去した。Ⅱ層（樽前aテフラ層）およびⅢ層が残存する部分は極めて少なく、大部分が耕作や過去の町道工事等の攪乱を受けていた（図Ⅲ－1）。一方、旧町道の真下にあたる部分はⅠ～Ⅴ層の残りがよく、Ⅰ層において近現代のものと思われる柱状土坑が確認されたため、この部分のⅠ層および残存するⅢ層を人力で調査した。Ⅳ層（樽前cテフラ層）も同じく非常に狭い範囲で確認されるにとどまったため人力により除去し、Ⅴ層～Ⅵ層の調査を人力で行った。

人力による調査は主に移植ゴテ、ねじり鎌、スコップ、鋤簾等を使用し、精査・清掃の際には竹べらや竹串、炉箒、ブラシ等を併用した。

遺構は平面図と必要に応じ断面図、遺物出土状況図、写真撮影などで記録した。Ⅲ層出土の遺物は個々に番号を付し地点計測を行った。Ⅴ層出土の遺物はグリッドごとに取り上げた。地点計測による取り上げの際の遺物番号は、層位や日付、分類等の属性にかかわらず通し番号を付した。Ⅲ層で検出した灰集中（ⅢAS－1）は、土壌ごとに取り上げ、現地で水洗選別（フローテーション）作業を行い、炭化木片、炭化種実類、骨片類等の微細遺物を回収した（表Ⅲ－3）。

発掘現場での写真撮影は6×7サイズフィルムカメラとデジタルカメラを併用した。

(3) 整理作業の方法

現地で作成した地形測量や遺構、遺物出土状況の原図は、訂正などの作業を行い素図を作成した。素図をもとに遺構図や全体図等をイラストレータでデータ化し、編集・掲載した。原図と素図には通し番号を付け、図面台帳を作成した。

出土した遺物の一次整理は土器等を阿部、石器等を新家がを行い、二次整理は阿部が行った。現場調査と並行して現地で水洗・乾燥・分類・遺物カードの添付・遺物台帳の作成、注記作業および仮収納を行った。注記は以下のように行った。

	遺跡名.	遺構名.	層位		遺跡名.	遺構名.	層位
注記例	遺構：トミ3.	ⅢAS－1.	1		遺構：トミ3.	TP－1.	フク土3
	遺跡名.	グリッド名.	層位.	遺物番号.	遺跡名.	グリッド名.	層位
	包含層：トミ3.	X20.	Ⅲb.	5.	包含層：トミ3.	Y16.	V

灰集中を対象としたフローテーション作業により回収した炭化材、炭化種実の放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に、同じく灰集中から出土した炭化種実の同定と、Ⅲ層から出土した漆

塗膜片の分析を株式会社パレオ・ラボに委託した（IV章参照）。また灰集中より出土した骨角器については、第2調査部第1調査課 福井淳一の助言を受けた。

土器・石器等の出土遺物はコンテナに収納し、収納台帳を作成した。漆塗膜片は現地で出土状況を記録し取り上げ、密閉容器に移し、水浸状態で冷暗所に保管した。徐々に自然乾燥した後、水溶性アクリル樹脂で定着した。これらの出土遺物は本報告書刊行後、北海道教育委員会の指示のもと、厚真町教育委員会に移管した。

掲載遺物の室内撮影は中山が行った。写真フィルムは現地撮影のものとともに写真台帳を作成し、アルバムに収納した。図面・写真等は北海道立埋蔵文化財センターにて保管される。 (新家)

5 遺物の分類

(1) 土器等

I群 縄文時代早期に属する土器群。

II群 縄文時代前期に属する土器群。

III群 縄文時代中期に属する土器群。

a類：円筒土器上層式およびそれに後続する厚真1式などに相当するもの。

b類：天神山式・柏木川式・北筒式・煉瓦台式などに相当するもの。

IV群 縄文時代後期に属する土器群。

a類：余市式・タプコブ式・手稲砂山式・入江式などに相当するもの。

b類：ウサクマイC式・手稲式・鮎潤式に相当するもの。

c類：堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属する土器群。

a類：大洞B・BC式に相当・併行するもの。東三川式など。

b類：大洞C₁・C₂式に相当・併行するもの。美々3式、ママチI・II群など。

c類：大洞A式・A'式に相当・併行するもの。ママチIII・IV・V群など。

このほか、I層から陶磁器片が出土している。

(2) 石器等

分類に使用している器種の名称、および掲載順は以下のとおりである。

剥片石器群：石鏃（長軸4cm未満）、石槍類（長軸4cm以上）、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、二次加工のある剥片（Rフレイク）、微細剥離のある剥片（Uフレイク）、石核、剥片（フレイク）

礫石器群：石斧・石斧片、たたき石（くぼみ石含む）、加工痕のある礫、礫・礫片

(3) その他の遺物

炭化材、炭化種実、動物骨片、カワシンジュガイの殻片、釘や鉄片、近現代のアルミ缶、プラスチック、ビニールなどが出土している。炭化木片、炭化種実はIII層で検出した灰集中（IIIAS-1）より土壌水洗選別（フローテーション）作業によって採取したものであるが、それ以外はI層から出土したもので、遺物点数に加えていない。

6 調査結果の概要

Ⅲ層からはアイヌ文化期のものと思われる灰集中（ⅢAS）1か所が検出された。遺物は漆椀の塗膜片のほかは礫・礫片が出土している。

V層からは平面形が小判形のTピット1基、柱穴状小土坑（VKP）2基を検出した。遺物は縄文時代中期、晩期の土器片、「石器の分類」で上述した石器類・礫等が出土した。

このほかI層から柱穴状小土坑が19基検出された。富里地区には昭和期以前からのアイヌの人々の伝承があり、関係は不明であるが、I KPとして記録した。I層からは、陶磁器片、馬の歯、カワシンジュガイの殻、炭化材、鉄片、アルミ缶、ビニールやプラスチックなども出土している。総遺物点数は縄文土器片416点、石器411点、礫・礫片394点、計1,221点である。（新家）

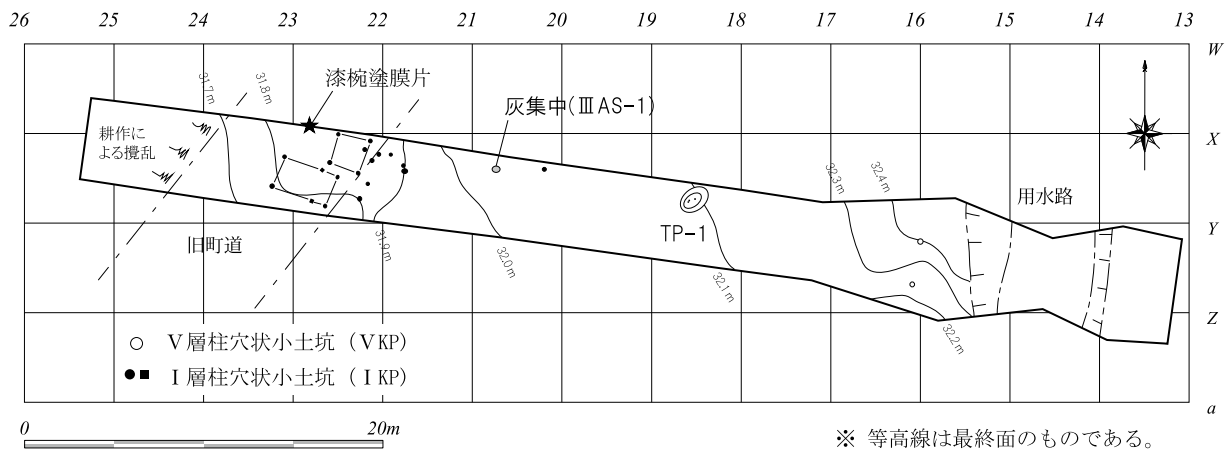


図 I-3 遺構位置図

表 I-1 検出遺構数一覧

Ⅲ層の遺構	灰集中 (ⅢAS)	V層の遺構	柱穴状小土坑 (VKP)	Tピット (TP)	I層の遺構 (近・現代)	柱穴状小土坑 (I KP)
	1		2	1		19

表 I-2 出土遺物総点数

		土器	石器	礫・礫片	計
Ⅲ層	包含層		1	21	22
Ⅳ層	包含層		1	1	2
V層	遺構			2	2
	包含層	362	355	342	1,059
I層・表採等		54	54	28	136
総計		416	411	394	1,221

※陶磁器片・骨・炭化物等は点数に含まず。

II 遺跡の環境

1 遺跡の立地と環境

(1) 位置と地名の由来

遺跡の所在する厚真町は、太平洋に面する勇払平野の東端に位置し、胆振総合振興局管内勇払郡に属する（図Ⅰ-1）。北部の山林地帯と南部の平野で構成され、町域のほぼ中央を厚真川が貫流する。厚真川は流路約52kmで、夕張山地南部を水源とし太平洋へ注ぐ二級河川で流域には水田地帯が広がる。北側は、夕張山地から続く山地で、太平洋と日本海の分水嶺として夕張市・由仁町と接し、東側はむかわ町、西側は、山地性丘陵を挟み安平町と、勇払平野で苫小牧市と接し、南側は砂浜が続き太平洋に臨んでいる。

町内は大きく厚真川沿いとむかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区に分かれる。厚真川沿いは、海岸と広大な水田地帯のある下流域の浜厚真、上厚真地区、中流域は厚真市街地を形成し、中流域から上流域にかけては幌内地区となっている。

町名になっている「厚真」は、アイヌ語の「アットマム」（向こうの湿地帯）が転訛したもので、厚真川の河口付近の地名であると言われている（『厚真村史』厚真村 1956）。

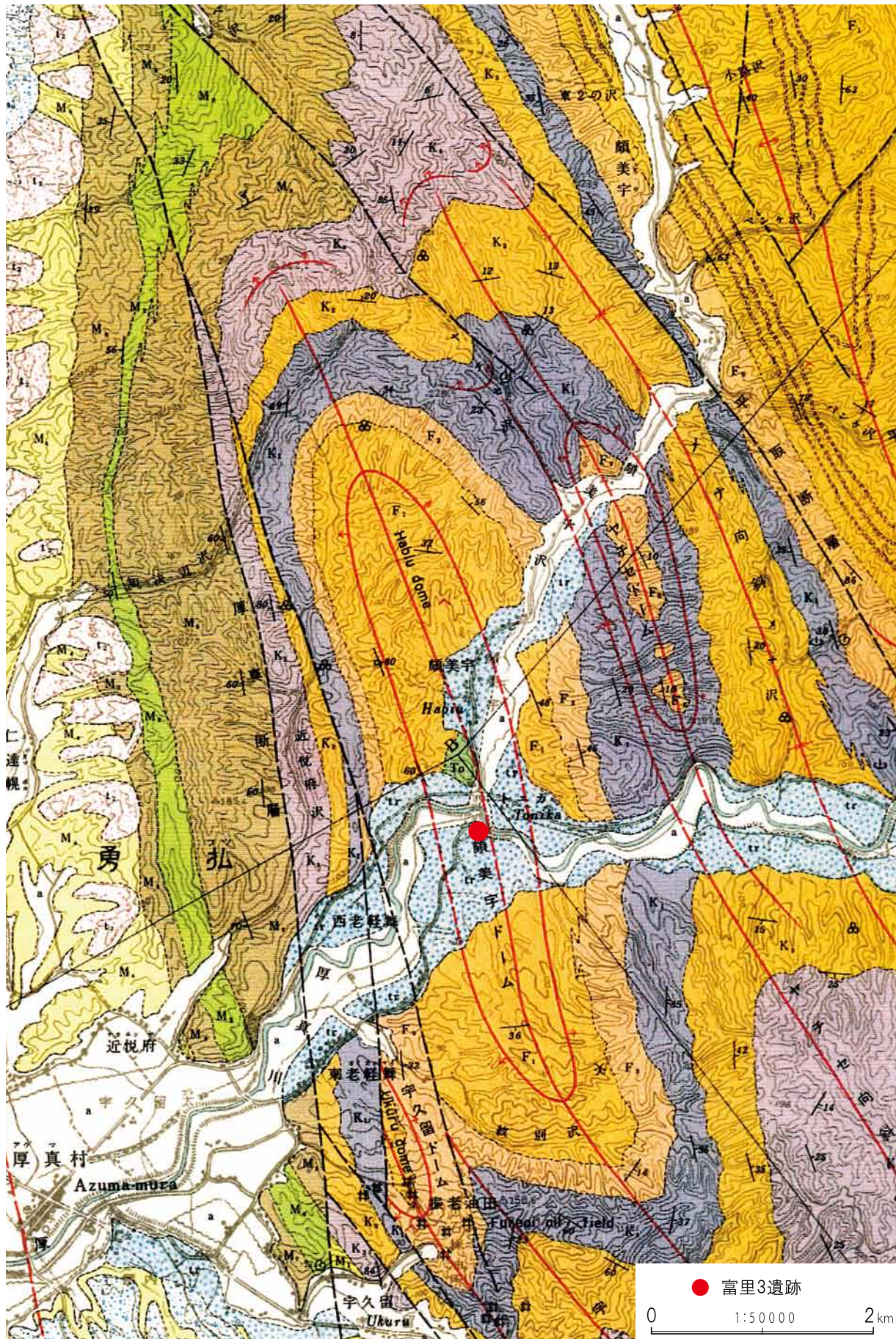
遺跡名の「富里」は、昭和32年の字名地番改正以前は、「トニカ」（当仁加、富仁加）であった。厚真村史によると「トンニカ」（かしの木の・かみ）とある。

(2) 遺跡周辺の地形・環境

遺跡は、厚真町市街地より北東へ5.3km、北から流れ込む頗美宇川^{はびう}との合流点付近に近い、厚真川左岸の標高約32mの河岸段丘上に立地している。厚真川は、夕張山地南部の夕張市、むかわ町の境付近に源流部を持ち、現在建設中の厚幌ダムのある上幌内地区を抜け、日高幌内川、シュルク沢川など比較的大きな支流が集まる幌内地区から、川沿いに沖積低地が拡がり主に水田として利用されている。

遺跡のある河岸段丘の基盤層は、新第三紀の砂岩および泥岩層と第四紀の砂や礫の段丘堆積層で、これらを支笏湖周辺の火山群の噴出物が覆っている（図Ⅱ-1）。隣接する厚真川の沖積低地との比高は約4mである。地表近くは、支笏湖の南側にある樽前山（標高1,103m）を噴出源とする降下火山灰が3層見られる。上層から1,739年に降下したTa-a層、1,667年のTa-b層、約2,500年前に降下したと推定されるTa-c層である。調査範囲内では、耕作のため上層部は削平されており、わずかに町道新町富里線（旧道）の下で、Ta-b層が残存していた。Ta-c層は上下2枚の遺物包含層に挟まれ、層厚約15cm程に堆積していた（図Ⅱ-2）。

遺跡の対岸にある標高164mの山は、アイヌ語地名で「コムヌプリ」と呼ばれる。地元では楢山と呼ばれ、麓には、現在は廃校となったが、楢山小学校があった。明治29年製版の「早来」5万分の1地形図には「コムヌプリ」の記載があり、厚真村史には、「コムシヌプリ」（ドンダリの・群在する・山）とある。遺跡付近の様子は、明治末期頃は「厚真川の川縁は、ヤチダモやアカダモの密林～中略～トニカの高台はナラノキ林」（池田・亀井 1978）、開拓初期の頃は「巨木鬱蒼の森林と、茅葺叢然の原野」（厚真村 1956）との記録がある。また安政5年に松浦武四郎がこの地を訪れ2泊しており、「戊午 東部 安都麻志 全」『戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌 中』（松浦・秋葉 1985）には「此地榲柏多き」と記述があり、開拓期以前の遺跡周辺、特に河岸段丘上は、ブナ科を主体とする落葉広葉樹が繁茂していたことが想像される。（村田）



※ 北海道開発庁昭和35年発行 5万分の1地質図 早来の一部に加筆した

2 土層

調査区北側壁面のメインセクション、グリッドY16-Z16間のトレンチセクションと基本土層の柱状図（図Ⅱ-2・3）を図示した。層位名は、基本土層はローマ字、遺構はアラビア数字で表した。主な観察項目は土色、土層の起源と混在状況、混入物、しまり、粘性などである。土色観察には『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所監修 2004）を用いた。

基本土層は厚真町教育委員会や当センターが調査した厚真町内の遺跡のものを参考にした。ただ、調査区の大部分で、現代の耕作や道路工事等の攪乱など人工的な削平のほか、自然作用による河川や土石流に起因すると思われるⅡ～Ⅴ層の層序が入り乱れた堆積状況がみられた。

基本土層は以下のとおりである。

I層：表土・耕作土など。

Ⅱ層：樽前bテフラ（Ta-b）。1667年降下。層厚約15cm。

Ⅲ層：黒色土。縄文時代晩期後葉～中近世アイヌ文化期の遺物包含層。層厚約15cm。

以下の細分層名を使用している場合がある。

Ⅲb層：黒色土。擦文文化期～中世アイヌ文化期の包含層。

Ⅲc層：黒色土（Ⅲb層よりやや明るい）。縄文時代晩期後葉～擦文文化期の包含層。

B-Tm：白頭山苦小牧テフラ。10世紀前半降下。Ⅲ層中に部分的に堆積。層厚は数センチ。

Ⅳ層：樽前cテフラ（Ta-c）。約2,500年前降下。層厚約15cm。

Ⅴ層：黒色土。縄文時代前期～晩期の遺物包含層。層厚約30cm。

部分的に、旧河道の氾濫等による水成堆積層が認められる。Ta-b層と思われるパミス粒が広く混在する状況も見られる。

Ⅵ層：漸移層。縄文時代早期の遺物包含層。層厚約15cm。

Ⅶ層：樽前dテフラ（Ta-d）由来の再堆積層。層厚約20cm。

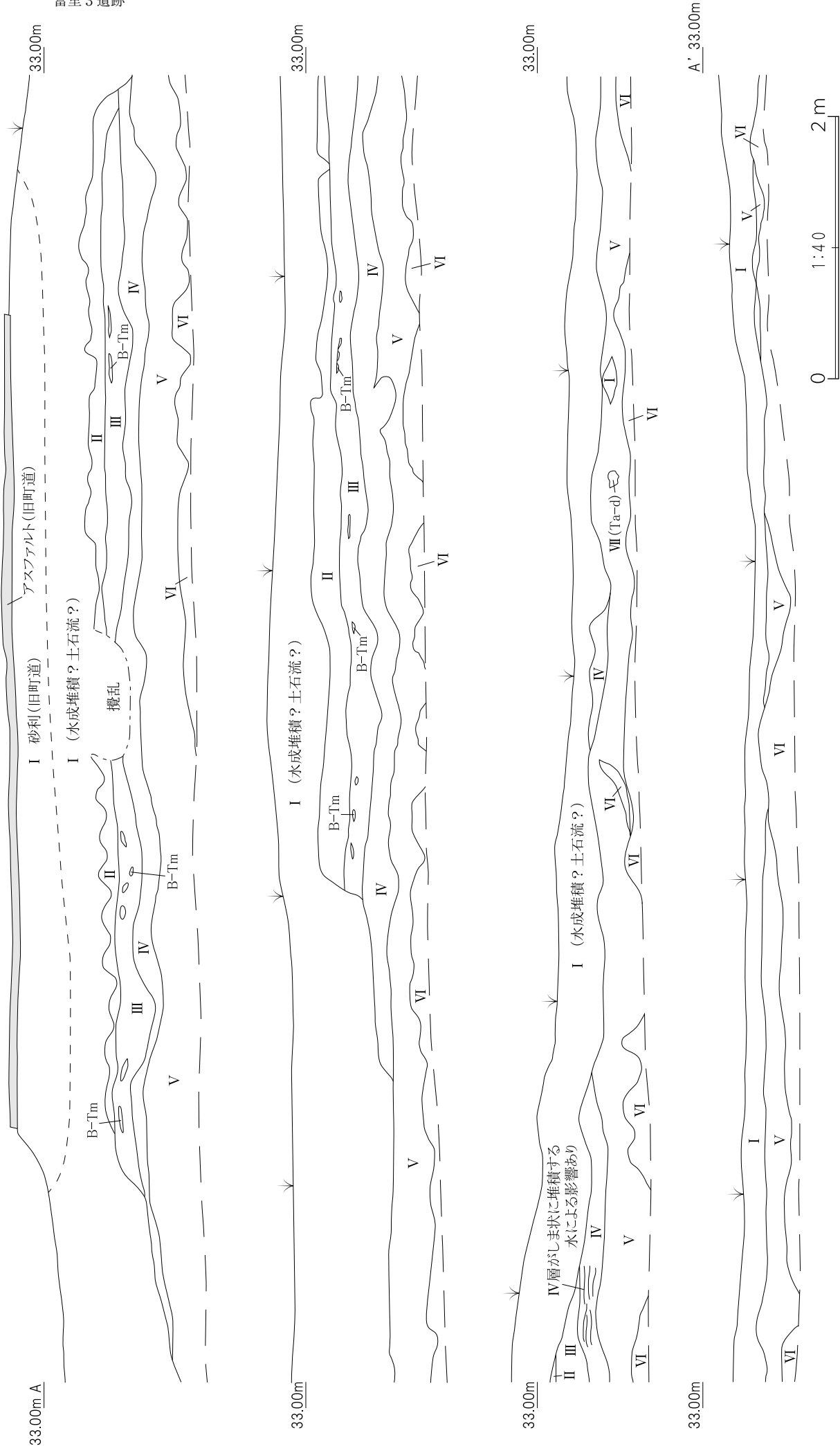
Ⅷ層：樽前dテフラ。約7,000年前降下。層厚約1m。

Ⅸ層：Ⅷ層下の粘土層または礫層。Tピットの壁で確認。Ⅷ層との間に層厚1～2cmの黒色土層がみられることがある。

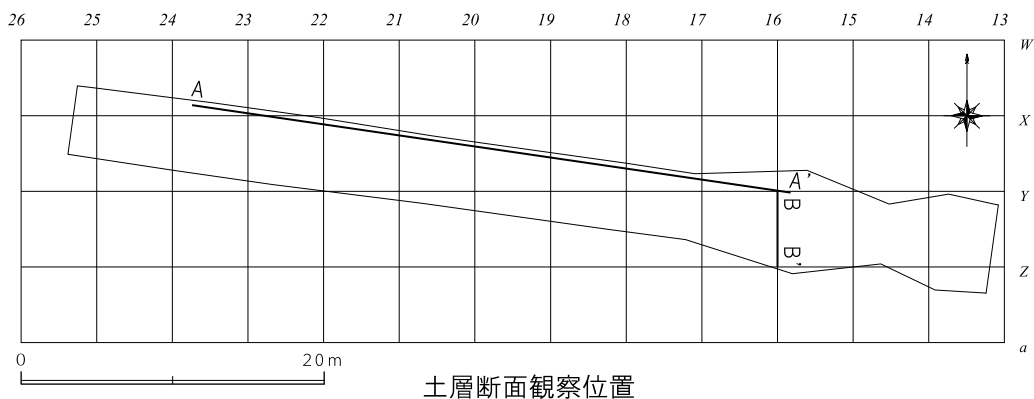
3 周辺の遺跡

平成27年度現在、北海教育委員会が埋蔵文化財包蔵地として登録している厚真町の遺跡数は136である。平成14年以降厚幌ダム建設工事およびダム建設事業に連動した厚幌導水路建設等の各種工事に伴う確認調査により、包蔵地の登録数が急増している。図Ⅱ-4には厚真町富里地区の富里3遺跡周辺の遺跡の一部を掲載した。

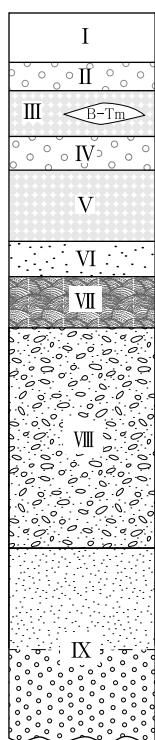
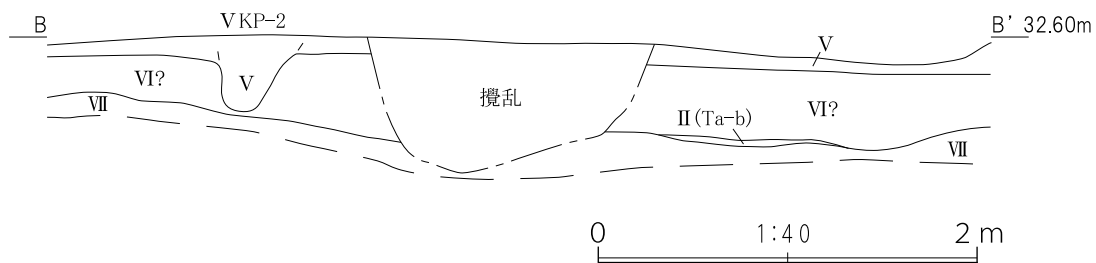
富里3遺跡と同じ段丘上の約700m南南東にはニタツプナイ遺跡（厚真町 2009・2010）、約500m西には富里2遺跡（厚真町 2010）がある。両遺跡では樽前bテフラより下層の縄文時代～近世アイヌ文化期の遺構・遺物が出土している。またニタツプナイ遺跡では樽前bテフラより上層でも遺構・遺物が発見され、近世アイヌ文化期の住居跡のほか、近・現代の建物跡も報告されている。（新家）



図II-2 メインセクション



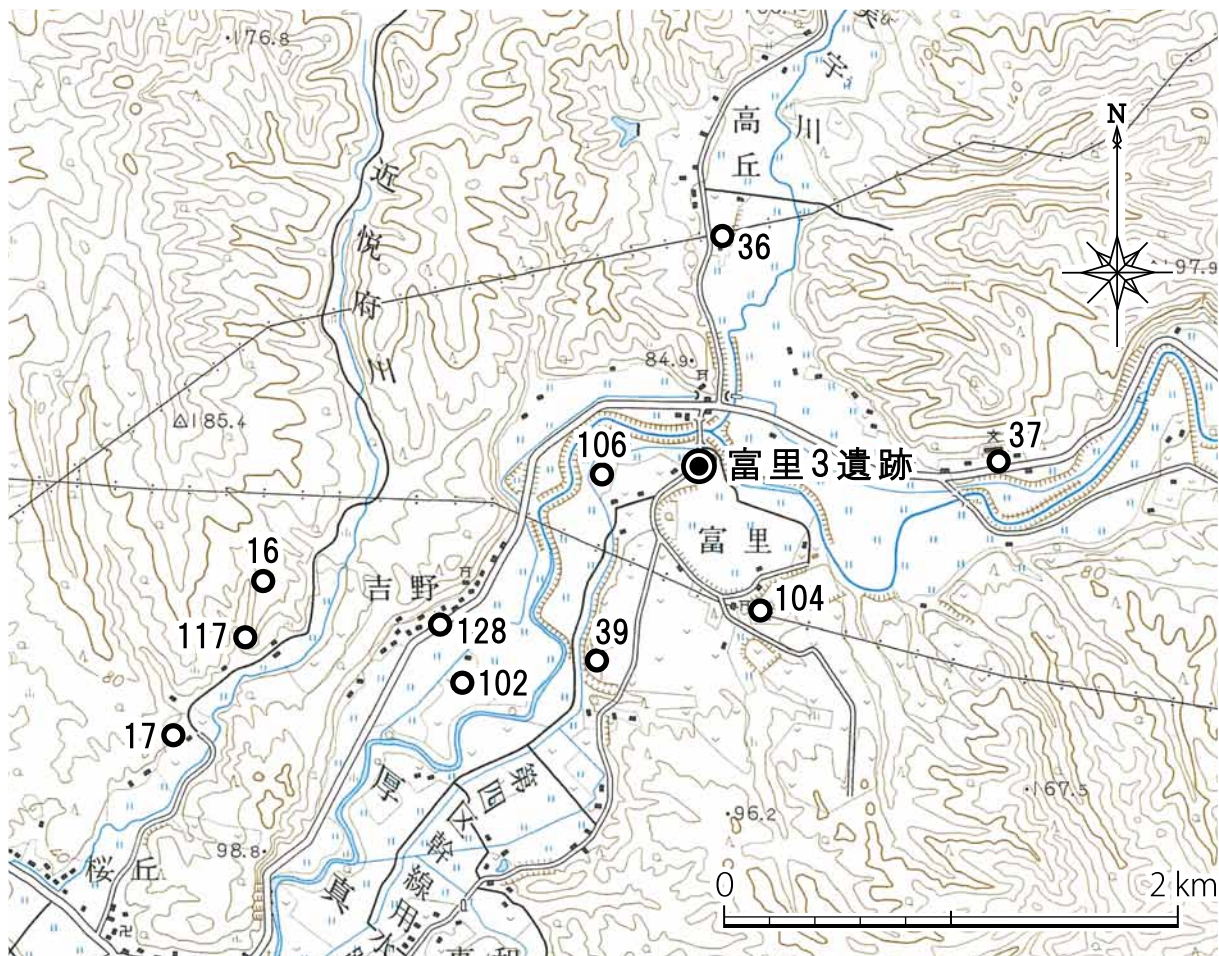
Y16-Z16 (B-B') トレンチセクション



- I. 表土
- II. にぶい黄橙 (10YR7/4) 堅 Ta-b
- III. 黒色 (10YR1.7/1) 粘性強 堅
B-Tm にぶい黄橙 (10YR6/4) 粘性なし 脆弱
- IV. 褐色 (10YR4/4) 粘性なし 脆弱 Ta-c
- V. 黒色 (10YR1.7/1) 粘性強 堅
- VI. 黒褐色 (10YR2/2) 粘性強 堅
Ta-d軽石 φ0.5cm少量混じる
- VII. 暗赤褐色 (5YR3/6) 粘性強 軟
- VIII. 明褐色 (7.5YR5/8) 粘性なし 脆弱
Ta-d軽石 φ0.5~2.0cm
- IX. 褐色 (10YR4/4) 粘性強 堅
河川堆積層
粘土質層と礫層。
VIII層との間に黒色土層が入ることあり
礫層はφ1~10cmの砂岩・泥岩の亜円~亜角礫

基本土層柱状図

図II-3 土層観察位置・トレンチセクション・基本土層柱状図



※ 国土地理院発行5万分の1地形図「早来」を使用

包蔵地 登載番号 (J-13)	遺跡名	所在地 (厚真町字富里)	種別	時代	立地	調査年度
16	桜丘チャシ跡	字桜丘73-1、76	チャシ跡	アイヌ	丘陵端部	
17	桜丘1	字桜丘139、142	遺物包含地	縄文(晩期)	丘陵裾部	
36	高丘9	字高丘595ほか	遺物包含地	続縄文	河岸段丘	
37	富里1	38-4、42-1・2ほか	遺物包含地	縄文(前～後期)、アイヌ	河岸段丘	H27(2015)町教委
39	チコマナイ	404	遺物包含地	縄文	河岸段丘	
102	吉野1	字吉野67ほか	遺物包含地	縄文(中・晩期)	微高地	
104	ニタップナイ	295、299-1・2	遺物包含地	縄文(前～晩期)、続縄文、 擦文、近世アイヌ	河岸段丘	H19～21(2007～ 2009)町教委
106	富里2	389-1	遺物包含地	縄文(後・晩期)、続縄文、 擦文、中近世アイヌ	河岸段丘	H21(2009)町教委
117	桜丘2	字桜丘76	遺物包含地	縄文(中・後期)	尾根	
128	ヲイカルマイ	字吉野24-1ほか	遺物包含地	続縄文～近代	河岸段丘	H22・23(2010・2011) 町教委
133	富里3	322-3～5ほか	遺物包含地	縄文(中・晩期)	河岸段丘	H27(2015)道埋文

* 遺跡名は「遺跡」の文字を省略した。「町教委」は厚真町教育委員会。「道埋文」は(公財)北海道埋蔵文化財センター、「調査」太文字は報告書刊行済み。

図Ⅱ-4 富里地区周辺の遺跡

III 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、Ⅲ層の灰集中（ⅢAS）1か所、Ⅴ層のTピット（TP）1基、柱穴状小土坑（VKP）2基、Ⅰ層の柱穴状小土坑（IKP）19基である。遺構の時期は、Ⅲ層の灰集中はアイヌ文化期、Ⅴ層のTピットは縄文時代中～後期、柱穴状小土坑は縄文時代中～晩期、Ⅰ層の柱穴状小土坑は近・現代と思われる。主な出土遺物は漆椀の塗膜、縄文土器、石器・礫類である。少量ながらシカと思われる焼骨片も出ている。遺物点数に含めていないが、Ⅰ層から陶磁器片が75点回収された。Ⅲ・Ⅳ層出土の遺物はすべて出土地点の計測を行った。

1 Ⅲ層の遺構と遺物

(1) 遺構

灰集中 ⅢAS-1（図Ⅲ-1・2、表Ⅲ-1・3・4、図版2・7）

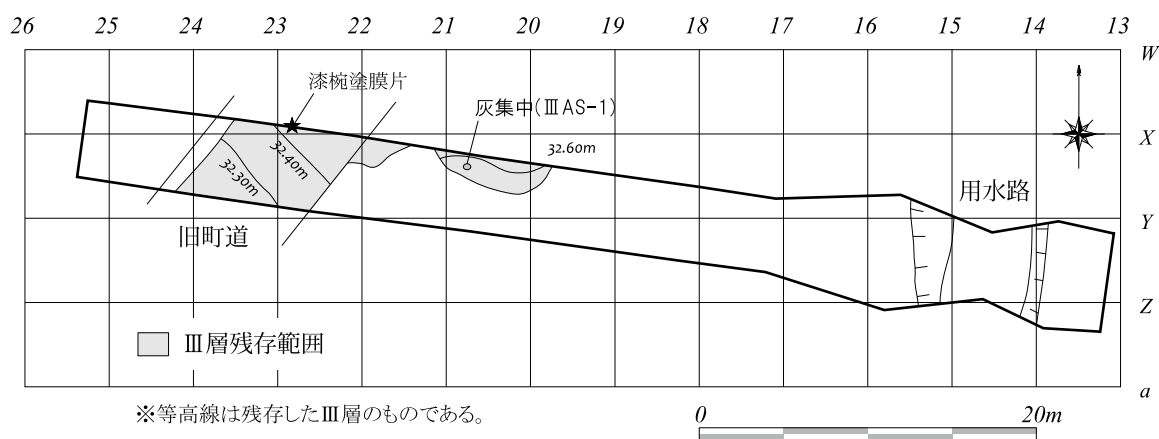
位置 X20 立地 調査区北縁辺部 平面形 楕円形 規模 0.44×0.32×0.04m

確認・調査 Ⅲ層残存部分調査中、灰黄褐色の灰層を検出した。灰層は2層に分けられ、上部は白く粘性の強いシルト質の灰層、下部は灰とⅢ層が混在する層である。灰層は水洗選別（フローテーション）作業を行い、骨角器1点を検出した。自然遺物では骨片5.9g、炭化物3.5g、炭化種子を回収した。骨片はウグイとみられる魚類の椎骨があるほかはほとんどがシカの四肢焼骨片と思われる。炭化種実と炭化材は放射性炭素年代測定の見本とした。また種実については同定も行い、ヒエ、アワの炭化種子、オニグルミ、スモモ近似種の炭化核、ハギ属の炭化種子などの結果が得られた（Ⅳ章2参照）。

遺物出土状況 灰層上部および周辺に粉状の獣骨片が散在していた。

時期 検出層位からアイヌ文化期と思われる。灰層の水洗選別作業で抽出された炭化種実および炭化材の年代測定結果は15～17世紀に相当する数値が出ている（Ⅳ章1節参照）。

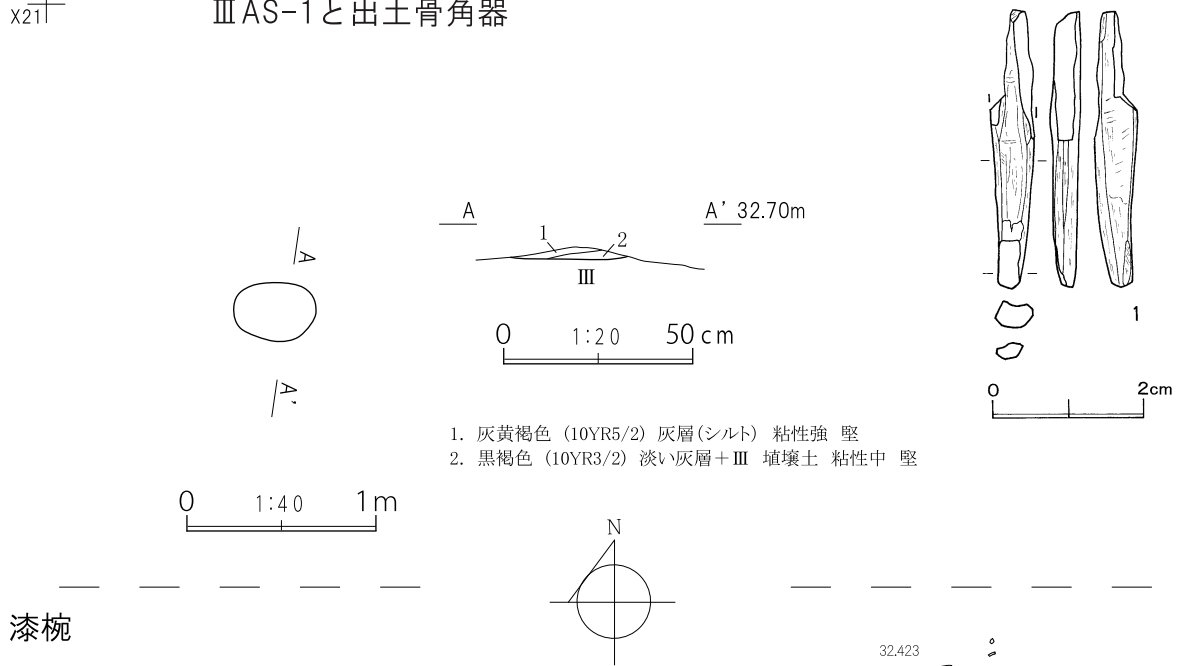
掲載遺物 1はシカの中手・中足骨の緻密質を利用した中柄あるいは刺突具の未成品である。両側面を金属器によって面取りしている。焼けており、白～グレーに変色している。



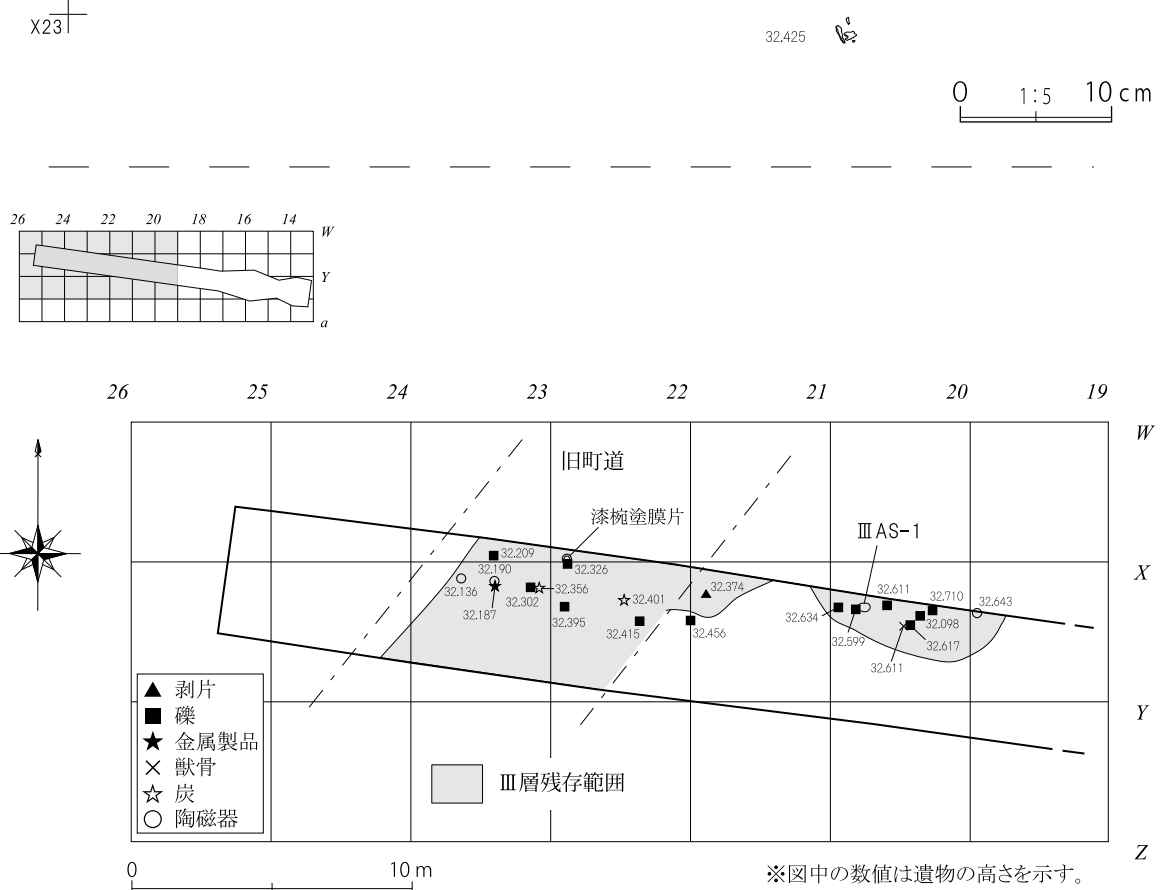
図Ⅲ-1 Ⅲ層残存範囲と遺構・遺物位置図

x21

ⅢAS-1と出土骨角器



x23



図Ⅲ-2 灰集中・漆椀出土状況・Ⅲ層出土遺物分布

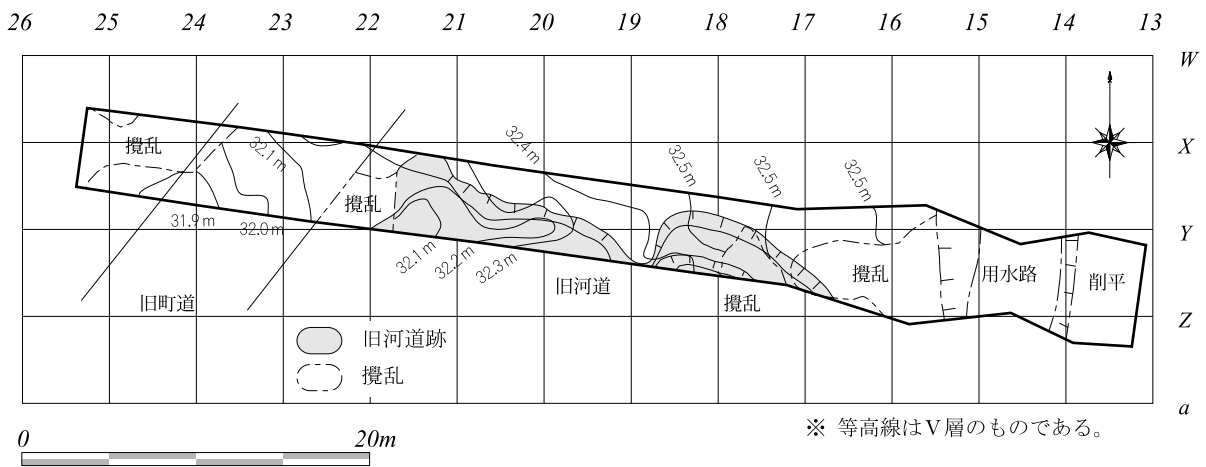
(2) 遺物

漆椀塗膜片 (図Ⅲ-2、図版2・7)

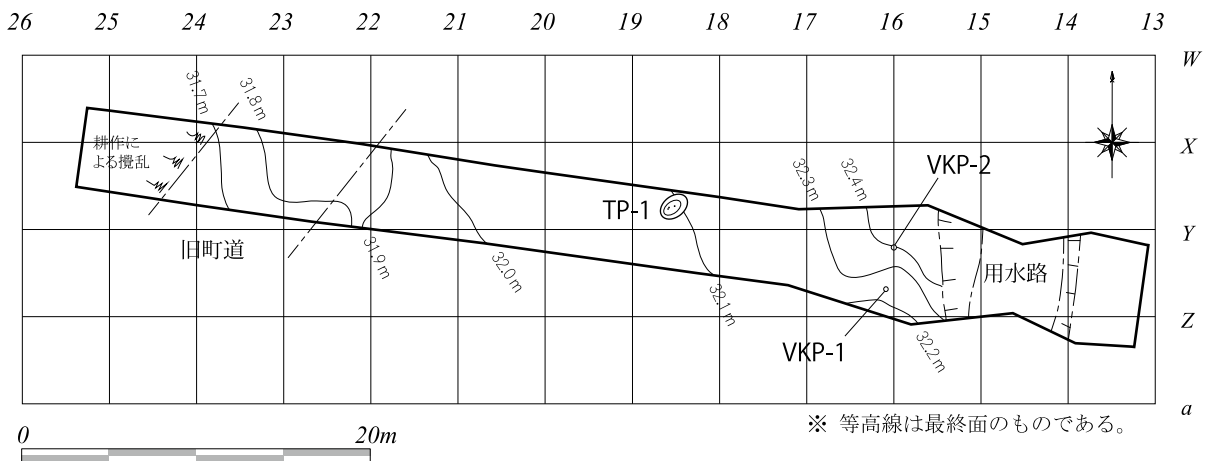
位置 W22 立地 調査区北西側縁辺部 規模 0.14×0.10m

Ⅲ層調査中、赤く薄い漆の破片を検出し、広がりを確認したところ、高台の直径が5～6cmほどあると思われる椀が、高台を上にした状態で出土した。椀の木質部は残っておらず、高台部分の塗膜と、椀の底部の漆片が若干残存していた。漆塗膜片の表面は赤く、外面底部の一部は黒褐色である。形状をほとんど保っていなかったため、塗膜一片一片を別々に取り上げ、保存処理を行った。また、分析結果をⅣ章に掲載している。検出層位からアイヌ文化期のものと思われる。

V層旧河道範囲



V層遺構位置図



図Ⅲ-3 V層旧河道範囲と遺構位置図

2 V層の遺構と遺物

(1) 遺構

柱穴状小土坑

VKP-1・2 (図Ⅲ-3・4、表Ⅲ-1、図版5)

位置 Y15・16 立地 調査区東側

規模 VKP-1 : 0.21×0.20/0.11×0.11/0.14m VKP-2 : 0.30×0.29/0.18×0.15/0.30m

概要 V層調査中、直径20~30cmほどの円形の黒い落ち込みを検出した。VKP-1は半截し、V層からⅦ層上面まで落ち込む黒色土の断面を確認した。VKP-2はY16-Z16を結ぶトレンチで黒色土の断面を確認した。立ち上がりや平面の輪郭が不明瞭であるため、根穴等の攪乱の可能性もある。

時期 周辺で出土した土器片の時期から、縄文時代中期~晩期と思われる。

Tピット

TP-1 (図Ⅲ-3・5、表Ⅲ-1・2、図版5)

位置 X18 立地 調査区中央北側際

規模 1.76×1.20/1.12×0.50/1.32m 長軸方向 N-56.7°-E

概要 Ⅵ層上面で黒褐色土の楕円形の落ち込みを検出した。短軸で半截し、Tピットであることを確認した。覆土は6層に分層した。上位約半分はⅥ層が主体、下位半分はⅦ・Ⅷ層が主体で、部分的にV層主体の薄層を含む。坑底はⅧ層(Ta-d)の軽石層まで達している。確認面から約1.3m下の坑底で、ほぼ長軸上に3本の杭跡(KP)を検出した。杭跡の直径は3~5cm、深さは17~25cmで、先端がやや先細る。覆土3層から砂岩の礫が1点出土している。

時期 遺構の形態や周辺で出土した土器片の時期から、縄文時代中期~後期と考えられる。

(2) 遺物

調査区内のV層は、旧河道あるいは何らかの自然の作用により水成再堆積した層が各所で見られ、遺物が大きく移動している可能性がある。V層包含層からは土器片362点、石器類355点、礫等342点が出土している。

土器 (図Ⅲ-6、表Ⅲ-5、図版8)

縄文時代中期~後期の土器

1~8は中期後葉の北筒式。1~3は断面三角形の口縁部肥厚帯をもち、直下に円形刺突列が施されている(1・2は土器片下端部にわずかに刺突が残存する)。1は肥厚帯上に爪形様の細かい刻みが密に連続する。2は内面口唇直下に縄文が施文されている。3は2~3cmの短い原体による横位回転施文帯が連続し、その間に細い無文帯を設けている。4も同様の施文である。5は綾線文、6は結束縄文、7は組み紐を用いたとみられる間隔のあいた条がみられる。8は内面の一部にも縄文施文がみられる。胎土に長さ1.5cmの小石を含む。

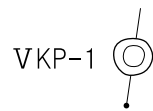
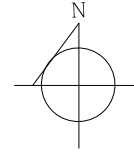
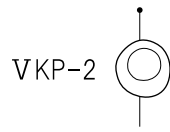
9・10は後期初頭余市式。9は表採したもの。暗赤褐色を呈し胎土に石英粒が多量含まれる、「富良野盆地系土器」(厚真町教育委員会 2010ほか)。10は内面調整がていねいである。

縄文時代晩期の土器

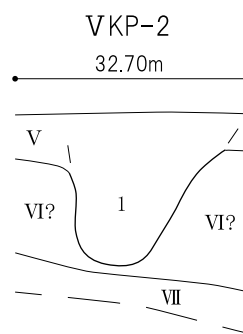
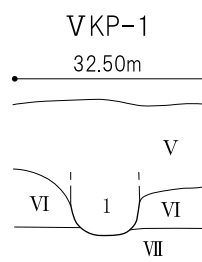
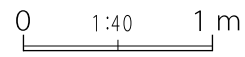
11~29は晩期中葉のもので、美々3式に相当するものが多いと思われる。11は口縁部が外反し、頸部がくびれ内面に段をもつ。口縁部に多条横走沈線、口唇上に撚糸縄線文が施されている。12は口縁

VKP-1・2

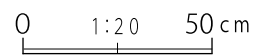
Y16



Z16

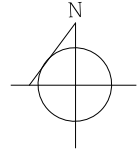
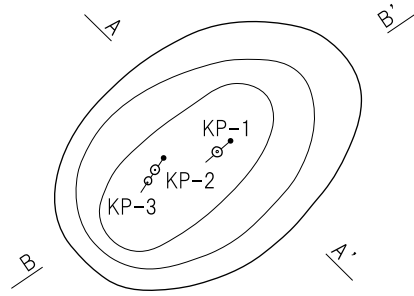


1. 黒色 (10YR1.7/1) V 粘性強 しまり弱

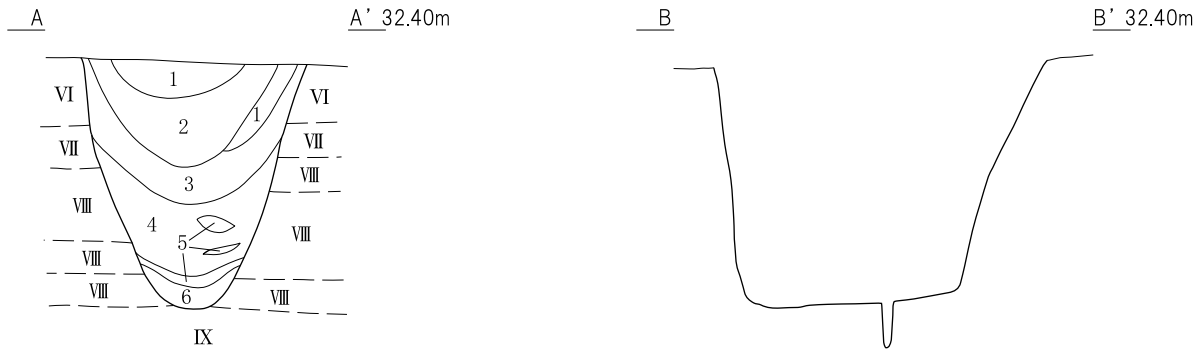


図III-4 柱穴状小土坑 (V層)

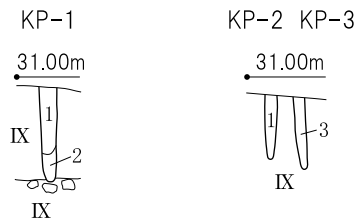
TP-1



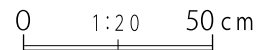
Y191



1. 黒褐色 (10YR2/3) VI >> VII 粘性中 堅 VIIIバミス粒φ0.5~1cm7%混入
2. 黒色 (10YR2/1) VI > VII 粘性中 堅 VIIIバミス粒φ0.5~1cm7%混入
3. 黒色 (10YR2/1) VI 粘性中 堅 VIIIバミス粒入らない
4. 暗赤褐色 (5YR3/6) VII 粘性強 堅 VIIのローム
5. 黒褐色 (10YR2/2) V 粘性強 軟
6. 暗赤褐色 (5YR3/6) 粘性なし 堅 VIIIのバミス層φ1~3cm



1. 黒色 (10YR1.7/1) 粘性中 軟
2. 黄褐色 (2.5YR5/3) 粘性強 軟 粘土層(VIII層)が変色したもの
3. 褐色 (7.5YR4/6) 粘性中 軟



図Ⅲ-5 Tピット

部が屈曲外反し、肩部が張るやや小型の鉢。口唇および内面口唇下に細い棒状工具による刺突が連続する。肩部下に3条の沈線が横走する。13は舟形土器。長軸端に中央がやや突出した3か所の突起を有し、直下に貫通孔が穿たれている。口唇上と胴部には、撚糸による3～4条単位の縄線文が施文されている。胴部は広く浅い凹線による無文部を設け、周囲に刺突が連続する。底面は湾曲し全面にRL縄文が施文されている。補修孔も観察される。14～17・19～21は深鉢の口縁部。14は3条の沈線が横走する。15～17は口縁部に3～5条の縄線が施文されている。15はていねいに磨かれた内面にスス状の黒色物質が付着している。16は明褐色を呈し、胴上部のくびれから外反する。口唇上に斜格子状のやや深い沈線が刻まれる。17の口唇上は刻みが連続する。18は大型の鉢とみられ、突起を含む口唇上に撚糸縄線文が施されている。19は内面調整がていねいである。20は内面口唇下に細い刻み列、外面から指頭押捺を連続して施している。21は口唇上にも縄文が施され、口唇下に貫通孔が1か所確認できる。22は口縁突起部。波頂部を欠く。口唇内面がやや肥厚する。突起下に貫通孔が穿たれている。23～25・27は深鉢胴部片。23は3条単位の曲沈線により文様がえがかれている。24・25は縄文が縦走する。26は底部の変換部に縄端圧痕がやや間隔をあけて連続する。27・28は同一個体。胴部は縄文が縦走し、底部付近・底面は縄文が多方向に施文される。28の底面はやや丸みをもつ。29は大型鉢の底部。大きく外反して立ち上がる。

なお、12・15・17～21・24～28は内面が黒色を呈している。(阿部)

石器(図III-7・8、表III-6、図版9)

1～4は黒曜石の石鏃である。1・2は三角鏃、3・4は有茎である。1は先端を欠損しており、全体に被熱して表面の光沢が失われている。2は下辺の一端が欠損している。4は上下両端を欠失している。

5は黒曜石の石槍である。素材には多くの細かな球果が含まれる。基部の先端を欠失している。

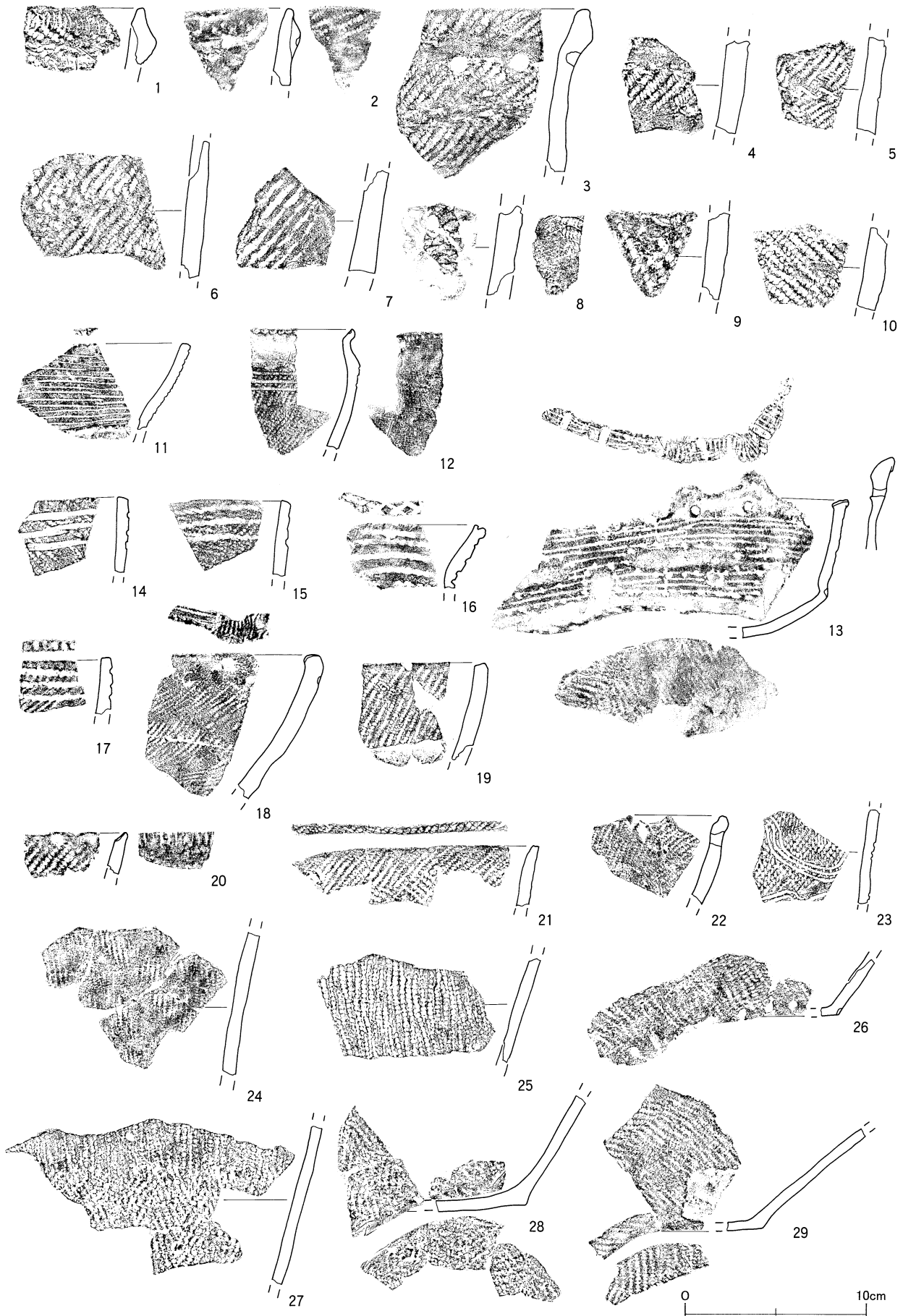
6・7は黒曜石の石錐である。6は主要な錐部以外に2か所、7は1か所、錐部様の短い先端部が作出されている。

8はつまみ付きナイフである。刃部のある下部分を破損し、つまみ部側が残存したものである。背面周縁とつまみ周辺を調整している。素材は赤味を帯びた黒曜石である。

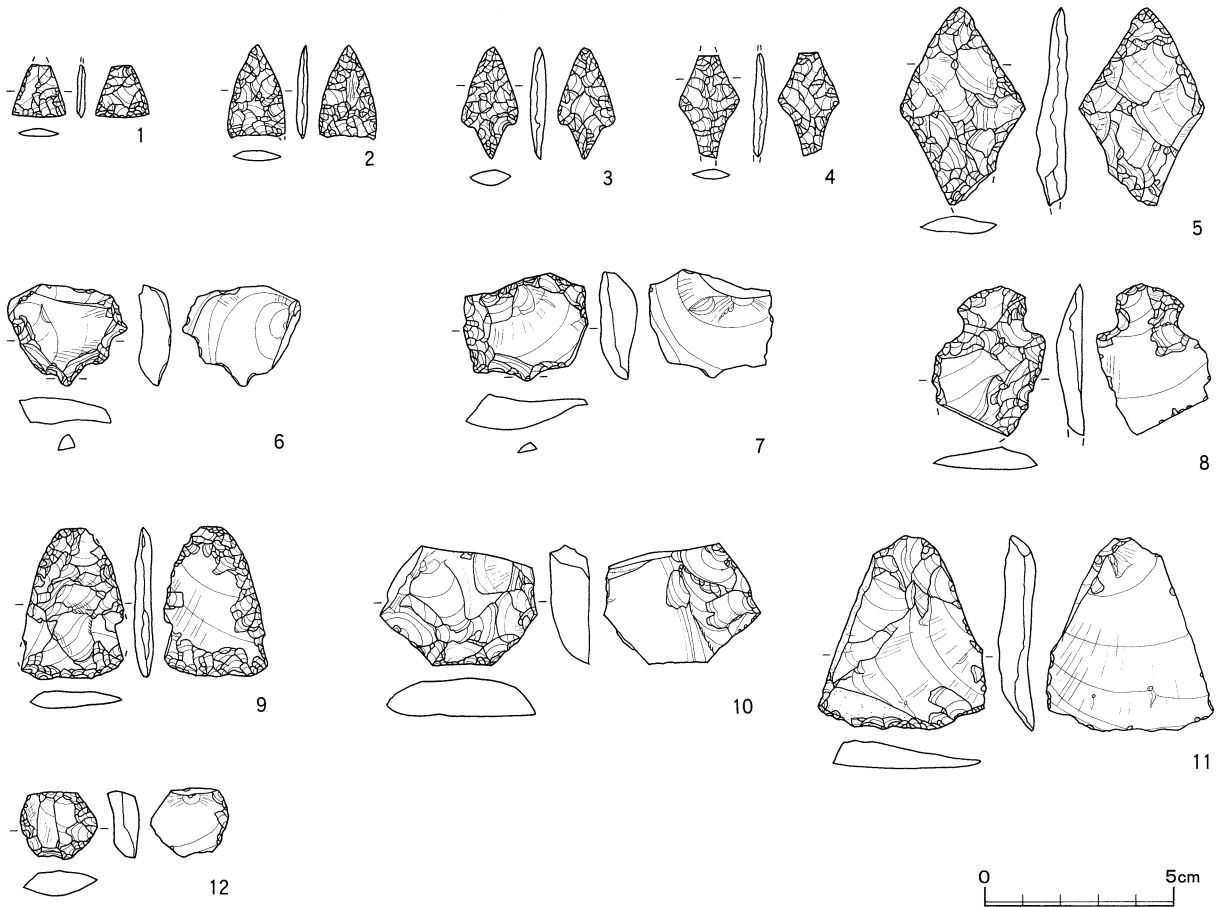
9～12は黒曜石のスクレイパーである。9・11は平面が三角形の薄手の素材を利用し、9は両面、10は背面下端に調整がみられる。9は石鏃の未成品の可能性もある。10・12はラウンドスクレイパーである。10は背面周縁の約半分、12は約4/5に波状の刃部調整がみられる。

13は緑色片岩の石斧である。刃部側は大きく破損し、基部側だけが残る。全体を丁寧に研磨して仕上げている。

14～22は砂岩のたたき石である。14は縦長の礫の一端を強く敲打している。また各側面にも敲打痕がみられる。15は素材の角部分3か所を使用している。16～22はいわゆるくぼみ石である。16～19は1面、20・21は2面、22は4面に敲打によるくぼみがみられる。(新家)



図III-6 包含層（V層）出土の土器



図Ⅲ-7 包含層（V層）出土の石器（1）

3 I層の遺構と遺物

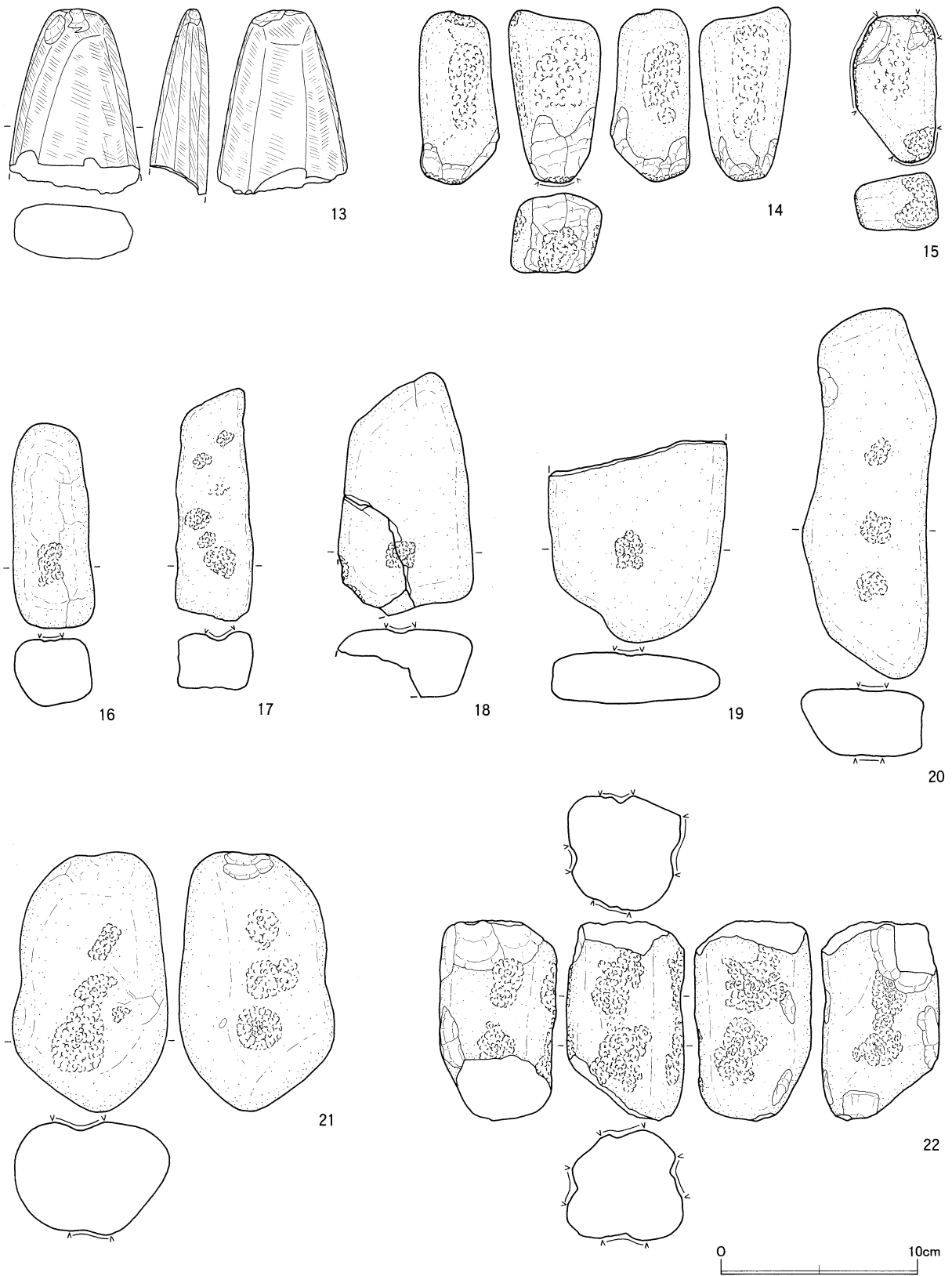
I層は樽前bテフラ降下（1667年）以降から現代までの表土・耕作土層を指し、近隣に近世～現代までのアイヌ民族に関する伝承があることから、歴史資料の可能性を考え、検出した土坑19基を遺構として記録した。

遺物は、陶磁器片、骨片、カワシンジュガイの殻片、鉄片、釘、アルミ缶、ビニール・プラスチックごみなどがI層や、攪乱層から縄文土器片とともに出土している。

柱穴状小土坑 I KP-1～19（図Ⅲ-9～11、表Ⅲ-1・2、図版2～4）

位置 X20～23 立地 旧町道下

概要 調査区内の旧町道部分は、重機によりアスファルトとすぐ下の砂利を除去したところ、II層（Ta-b）が攪乱を免れ残存していた。この際、II層を切って掘り込まれたと思われる丸い落ち込みが数か所確認された。II層除去後、III層調査中にII層混じりの堅い攪乱層の落ち込みを20数か所検出した。配置などから近・現代の建物の柱跡とも考えられたため19基を柱穴状小土坑（I KP）とした。土坑は樽前bテフラ降下後に掘り込まれた後、旧町道が敷設されるまでの間に、自然の作用によりII層を含んだ大量の土砂で一気に埋まったと考えられる。

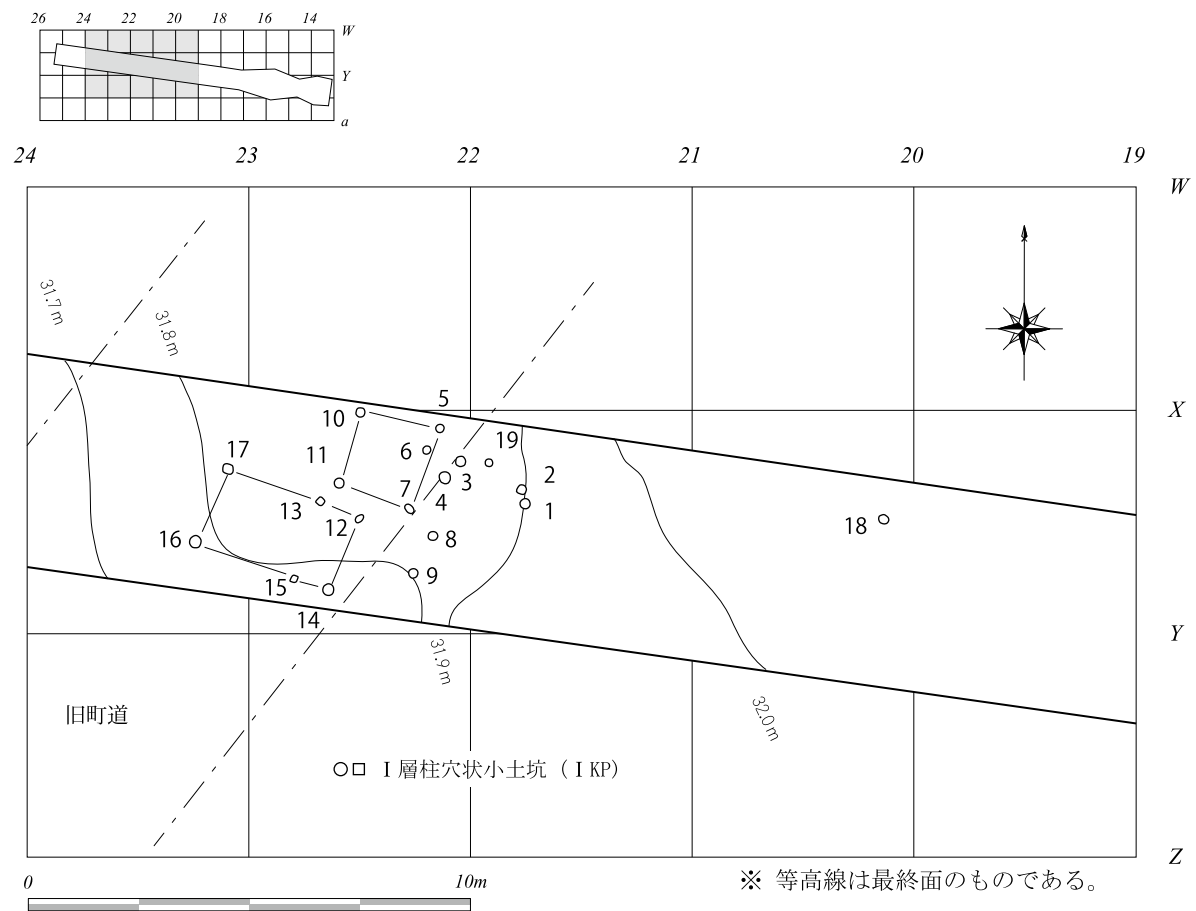


図Ⅲ-8 包含層（V層）出土の石器（2）

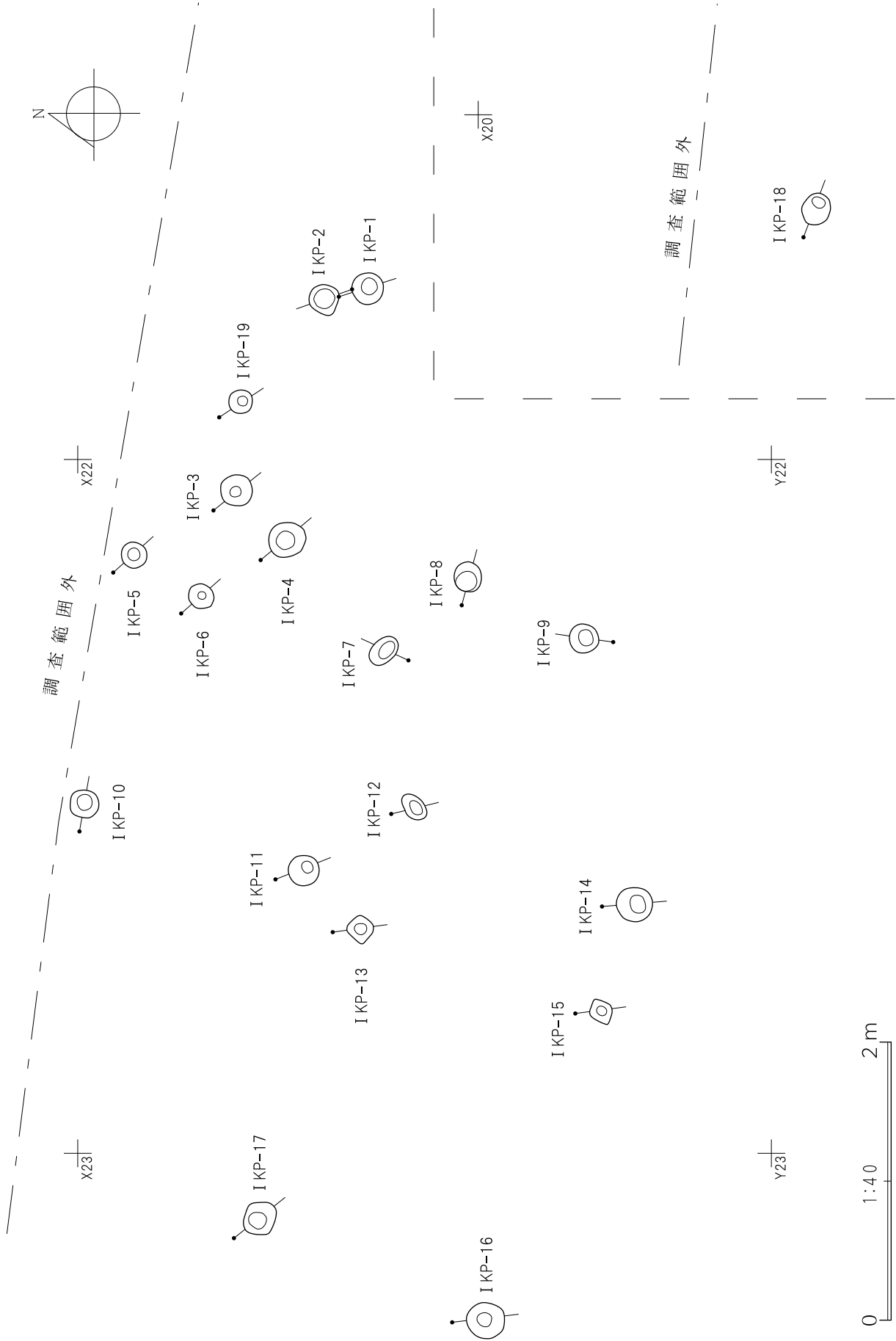
平面形の特徴は大きく3つに分かれ、I KP-（以下略）1・3～6・8～11・14・16・19は円形、2・13・15・17は隅丸方形、7・12・18は楕円形である。3・4・11・16・17は深さが25cm以上ある。覆土はいずれも樽前bテフラと攪乱層や黒色土が混入したもので、非常に堅くしまる。12～17と、5・7・10・11はそれぞれ方形に配置されているように見え、建物の跡の可能性もある。5-10、7-11、16-17間はそれぞれ約1.8m、10-11間は約1.7m、12-17間は約3.2m、12-13、14-15間はそれぞれ約0.9m離れている。

出土遺物 覆土から砂岩の礫が1点出土している。また、周辺のI層や攪乱層からは多くの陶磁器片が出ている。

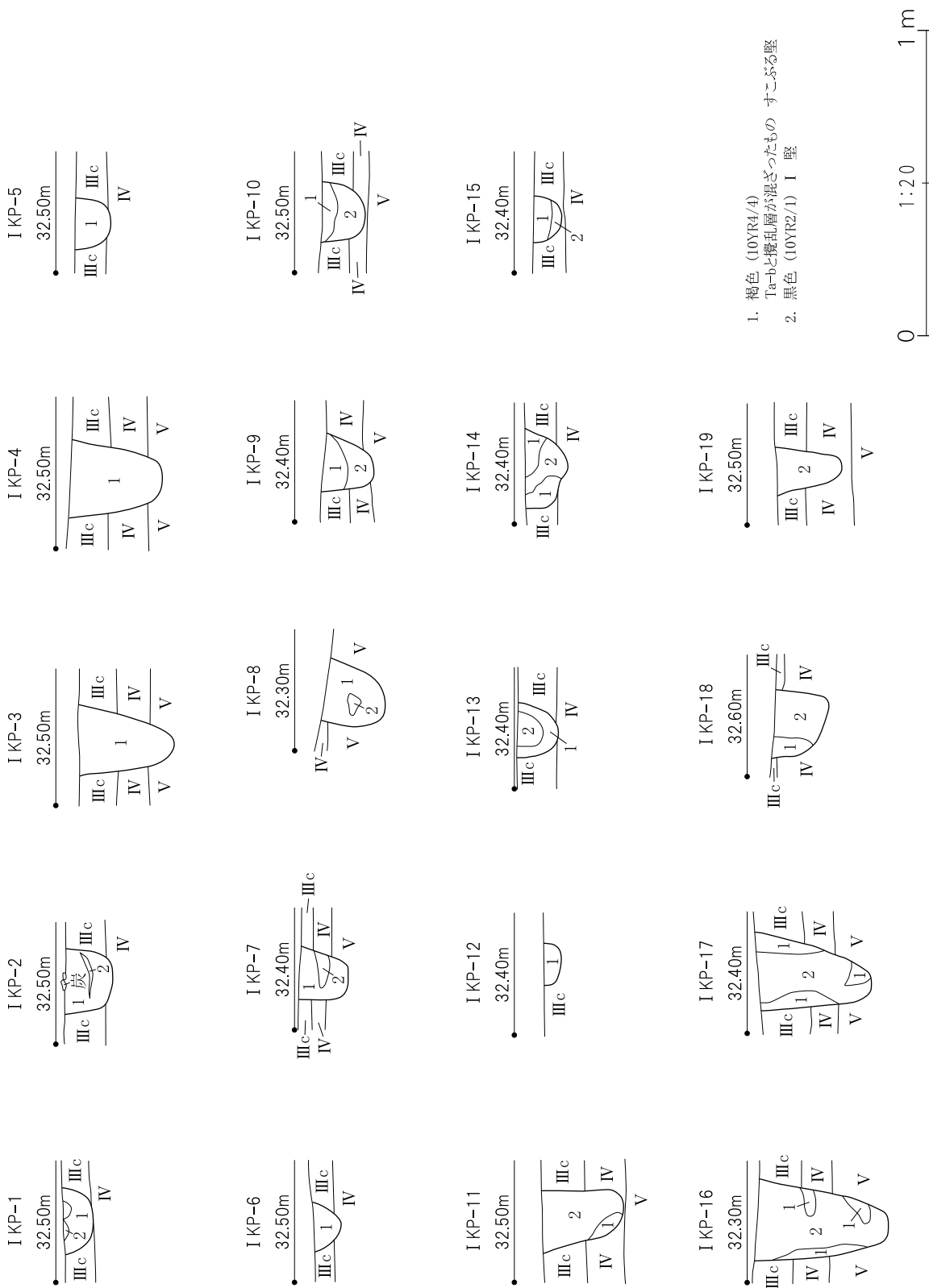
時期 樽前bテフラを切っており、近世～現代のものと考えられる。 (新家)



図Ⅲ-9 I層遺構位置図



図Ⅲ-10 柱穴状小土坑（I層）（1）



図III-11 柱穴状小土坑 (I層) (2)

表Ⅲ-1 検出遺構一覧

遺構名	挿図No. (Ⅲ-)	写真 図版 No.	調査区	規模 (m)			確認面	時期	備考
				確認面の 長径×短径	床・底面の 長径×短径	深さ 厚さ			
ⅢAS-1	1・2	2	X20	0.44×0.32	—	0.04	Ⅲ	中～近世アイヌ文化期	¹⁴ C、種実同定
VKP-1	3・4	5	Y16	0.21×0.20	0.11×0.11	0.14	V	縄文時代中～晩期	
VKP-2	3・4	5	Y15・16	0.30×0.29	0.18×0.15	0.30	V	縄文時代中～晩期	
TP-1	3・5	5	X18	1.76×1.20	1.12×0.50	1.32	VI	縄文時代中～後期	小判形
KP-1	5	5		0.05×0.05	0.02×0.02	0.25			
KP-2	5	5		0.03×0.03	0.01×0.01	0.17			
KP-3	5	5		0.03×0.03	0.01×0.01	0.19			
I KP-1	9～11	2～4	X21	0.23×0.22	0.12×0.11	0.10	Ⅲc	近・現代	
I KP-2	9～11	2～4	X21	0.24×0.22	0.15×0.14	0.16	Ⅲc		
I KP-3	9～11	2～4	X22	0.24×0.23	0.08×0.07	0.31	Ⅲc		
I KP-4	9～11	2～4	X22	0.30×0.25	0.14×0.12	0.31	Ⅲc		
I KP-5	9～11	2～4	X22	0.18×0.18	0.09×0.09	0.11	Ⅲc		
I KP-6	9～11	2～4	X22	0.19×0.18	0.06×0.05	0.09	Ⅲc		
I KP-7	9～11	2～4	X22	0.24×0.14	0.18×0.09	0.16	Ⅲc		
I KP-8	9～11	2～4	X22	0.21×0.20	0.15×0.14	0.21	Ⅲc		
I KP-9	9～11	2～4	X22	0.22×0.21	0.11×0.10	0.17	Ⅲc		
I KP-10	9～11	2～4	X22	0.21×0.20	0.12×0.10	0.14	Ⅲc		
I KP-11	9～11	2～4	X22	0.22×0.22	0.09×0.08	0.28	Ⅲc		
I KP-12	9～11	2～4	X22	0.22×0.14	0.12×0.10	0.05	Ⅲc		
I KP-13	9～11	2・4	X22	0.21×0.19	0.09×0.08	0.14	Ⅲc		
I KP-14	9～11	2・4	X22	0.26×0.24	0.14×0.10	0.14	Ⅲc		
I KP-15	9～11	2・4	X22	0.20×0.16	0.08×0.07	0.09	Ⅲc		
I KP-16	9～11	2・4	X23	0.29×0.26	0.10×0.10	0.45	Ⅲc		
I KP-17	9～11	2・4	X23	0.26×0.25	0.12×0.11	0.39	Ⅲc		
I KP-18	9～11	2・4	X20	0.24×0.20	0.10×0.08	0.19	Ⅲc		
I KP-19	9～11	2・4	X21	0.18×0.18	0.07×0.07	0.22	Ⅲc		

表Ⅲ-2 出土遺物点数一覧

遺構	分類 層位	Ⅲb	Ⅳa	Ⅴb	土器 計	石鏃	石槍	石錐	つまみ付 きナイフ	スクレ イパー	Rフレ イク	Uフレ イク	石核	剥片	石斧・ 石斧片	たた き石	礫	石器・ 礫計	総計
		TP-1	覆土3																1
I KP-9	覆土																1	1	1
包含層	I	5		47	52						1	2		44		5	27	79	131
	Ⅲb																17	17	17
	Ⅲc													1			4	5	5
	Ⅳ													1			1	2	2
	Ⅴ	37	1	324	362	5	2	2	1	5	7	4	1	296	2	31	342	698	1,060
表採・排土			1	1	2											1	1	2	4
計		42	2	372	416	5	2	2	1	5	8	6	1	342	2	37	394	805	1,221

表Ⅲ-3 フローテーション結果一覧

遺構/ 発掘区	層位	試料番号	採取量		回収量 (g)			回収遺物		
			体積 (ml)	乾燥重量 (g)	残渣	浮遊物 2mm	浮遊物 0.425mm	骨片 (g)	炭化物 (g)	炭化種子 (粒)
ⅢAS-1	灰	TM3-1・2	6,200	3,420	69.9	2.5	9.2	5.9	3.5	60

表Ⅲ-4 遺構出土骨角器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	遺構/発掘区	層位	大きさ(cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
図Ⅲ-2	1	7-1	ⅢAS-1	灰	3.7	0.6	0.4	0.93	フローテーション回収

表Ⅲ-5 包含層出土掲載土器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	発掘区	層位	点数		分類	器種	部位	胎土・調整等	文様等	備考	個体No.
					破片	計							
図Ⅲ-6	1	8	Y15	V	1	1	Ⅲb	深鉢	口縁	砂粒やや多量	口縁部肥厚带上刻み列(爪形様)、円形刺突		11
6	2	8	Y15	V	1	1	Ⅲb	深鉢	口縁	砂粒やや多量	口縁部肥厚帯、円形刺突、内面口縁部LR縄文		12
6	3	8	X17	V	1	1	Ⅲb	深鉢	口縁	砂粒やや多量	口縁部肥厚帯、円形刺突、LR縄文(縄端部施文)	同一個体	13
6	4	8	Y17	V	1	1	Ⅲb	深鉢	胴	砂粒やや多量	LR縄文(縄端部施文)		16
6	5	8	Y16	I	1	1	Ⅲb	深鉢	胴	砂粒やや多量、内面ハラナデ	第1種結束縄文(一部重複)		15
6	6	8	Y15	V	1	1	Ⅲb	深鉢	胴	砂粒やや多量	綾線文		14
6	7	8	X22	V	1	1	Ⅲb	深鉢	胴	砂粒やや多量	R縄文		18
6	8	8	Y18	I	1	1	Ⅲb	深鉢	胴	砂粒やや多量、礫含む	LR縄文		19
6	9	8	表採		1	1	Ⅳa	深鉢	胴	砂粒・石英粒多量	RL縄文(縄端部施文)		20
6	10	8	Y18	V	1	1	Ⅳa	深鉢	胴	砂粒やや多量、内面ミガキ	RL縄文(縄端部施文)		17
6	11	8	Y20	I	1	1	Vb	鉢	口縁	砂粒やや多量、内面ミガキ	多条横走沈線、口唇上縄線		21
6	12	8	Y15	V	2	2	Vb	深鉢	口縁	砂粒やや多量、内面ナデ	横走沈線、LR縄文、刺突列		30
6	13	8	Y18	V	4	5	Vb	鉢	口～底	砂粒やや多量、内面ナデ	縄線文、刺突列、凹線、貫通孔/突起、補修孔		1
		Y18	I	1									
6	14	8	X17	V	1	1	Vb	深鉢	口縁	砂粒少量、内面ケズリ、ナデ	横走沈線、RL縄文		25
6	15	8	X15	V	1	1	Vb	深鉢	口縁	砂粒少量、内面ミガキ	縄線文、LR縄文		23
6	16	8	Y16	V	1	1	Vb	深鉢	口縁	砂粒やや多量、内面ケズリ、ナデ	縄線文、口唇上斜格子状沈線		24
6	17	8	Y17	V	1	1	Vb	深鉢	口縁	砂粒やや多量	縄線文、LR縄文、口唇上刻み		22
6	18	8	Y16	V	2	2	Vb	鉢	口縁	砂粒やや多量、内面ナデ	LR縄文、口唇上縄線(突起含む)		26
6	19	8	X18	V	3	3	Vb	深鉢	口縁	砂粒やや多量、内面ミガキ	LR縄文		28
6	20	8	Y15	I	1	1	Vb	深鉢	口縁	砂粒やや多量	LR縄文、内面口縁部刻み		27
6	21	8	Y16	V	3	3	Vb	深鉢	口縁	砂粒やや多量、内面ナデ	LR縄文、貫通孔、口唇上縄文		32
6	22	8	Y15	V	1	1	Vb	深鉢	口縁	砂粒やや多量、内面ケズリ、ナデ	LR縄文/突起、貫通孔		29
6	23	8	Y18	V	1	1	Vb	深鉢	胴	砂粒やや多量、内面ミガキ	曲沈線、LR縄文		31
6	24	8	X19	V	4	4	Vb	深鉢	胴	砂粒やや多量、内面ナデ	RL縄文		4
6	25	8	Y19	V	3	3	Vb	深鉢	胴	砂粒やや多量、内面ナデ	RL縄文(帯縄文)		3
6	26	8	Y19	V	4	4	Vb	鉢	底	砂粒やや多量	刺突、RL縄文		33
6	27	8	Y15	V	2	5	Vb	深鉢	胴	砂粒少量、内外面ナデ	RL縄文	同一個体	2①
		Y15	I	1									
		Y16	V	1									
		Y16	I	1									
6	28	8	Y15	V	1	5	Vb	深鉢	底	砂粒少量、内外面ナデ	RL縄文	同一個体	2②
		Y16	V	2									
		Y16	I	2									
6	29	8	Y15	V	2	2	Vb	鉢	底	砂粒少量、内面ナデ	RL縄文		34

表Ⅲ-6 包含層出土掲載石器一覧

挿図 番号	掲載 番号	写真図 版番号	発掘区	層位	遺物名	石材	大きさ (cm)			重量 (g)	備考	個体 番号
							長さ	幅	厚さ			
図Ⅲ-7	1	9	X20	V	石鏃	黒曜石	(1.4)	1.4	0.2	0.4		2
7	2	9	Y17	V	石鏃	黒曜石	(2.5)	1.5	0.3	0.9		4
7	3	9	Y15	V	石鏃	黒曜石	2.9	1.5	0.4	1.3		3
7	4	9	X19	V	石鏃	黒曜石	(2.7)	1.6	0.4	1.1		1
7	5	9	X18	V	石槍	黒曜石	(5.2)	3.3	0.8	7.9		5
7	6	9	Y15	V	石錐	黒曜石	2.7	3.2	0.8	6.2		6
7	7	9	Y17	V	石錐	黒曜石	2.9	3.2	1.0	7.3		7
7	8	9	X22	V	つまみ付きナイフ	黒曜石	(4.0)	3.0	0.7	6.3		8
7	9	9	X19	V	スクレイパー	黒曜石	4.0	(2.7)	0.5	5.7		9
7	10	9	Y15	V	スクレイパー	黒曜石	3.2	4.2	1.0	14.7		10
7	11	9	Y18	V	スクレイパー	黒曜石	5.1	4.4	0.7	14.3		12
7	12	9	Y18	V	スクレイパー	黒曜石	1.8	2.0	0.7	2.6		11
8	13	9	X16	V	石斧	緑色片岩	(6.3)	(4.4)	(2.0)	75.5		13
8	14	9	X18	V	たたき石	砂岩	8.7	4.6	3.9	203.5		14
8	15	9	X19	V	たたき石	砂岩	7.4	4.2	2.9	127.3		15
8	16	9	X19	V	たたき石	砂岩	10.4	4.1	3.4	305.3	くぼみ石	20
8	17	9	X17	V	たたき石	砂岩	11.8	3.9	3.0	205.4	くぼみ石	17
8	18	9	X19	V	たたき石	砂岩	(12.3)	(6.8)	(3.4)	445.0	くぼみ石	19
8	19	9	Y18	V	たたき石	砂岩	(10.2)	(9.0)	(2.6)	329.0	くぼみ石	23
8	20	9	Y15	V	たたき石	砂岩	18.7	6.7	3.4	570.0	くぼみ石	22
8	21	9	X18	V	たたき石	砂岩	13.1	7.9	5.7	700.0	くぼみ石	18
8	22	9	X19	V	たたき石	砂岩	10.1	5.9	5.9	187.6	くぼみ石	21

IV 自然科学的分析

1 富里3遺跡における放射性炭素年代

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

富里3遺跡は、北海道勇払郡厚真町富里322（北緯42°45'23"、東経141°55'30"）に所在する。測定対象試料は、Ⅲ層中に形成された灰集中から出土した炭化種子と木炭各1点である（表Ⅳ-1）。Ⅱ層は樽前bテフラ（西暦1667年降下）、Ⅳ層は樽前cテフラ（約2500年前降下）で、Ⅲ層はそれらに当たる。

2 測定の意義

遺跡内に位置する遺構の年代に関する情報を得て、集落形成過程復元の考察資料とする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表Ⅳ-1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表Ⅳ-1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表Ⅳ-1に、補正していない値を参考値として表Ⅳ-2に示した。¹⁴C年

代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表IV-1に、補正していない値を参考値として表IV-2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表IV-2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表IV-1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、TM3-1が $350 \pm 20\text{yrBP}$ 、TM3-2が $440 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、TM3-1が1475~1625cal ADの間に3つの範囲、TM3-2が1434~1455cal ADの範囲で示され、アイヌ文化期に相当する (臼杵編 2007)。テフラの年代と整合的な結果である。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表IV-1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-151753	TM3-1	ⅢAS-1 灰層	炭化種子(堅果)	AAA	-26.41 ± 0.49	350 ± 20	95.69 ± 0.27
IAAA-151754	TM3-2	ⅢAS-1 灰層	木炭	AaA	-22.36 ± 0.59	440 ± 20	94.66 ± 0.29

[#7646]

表IV-2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

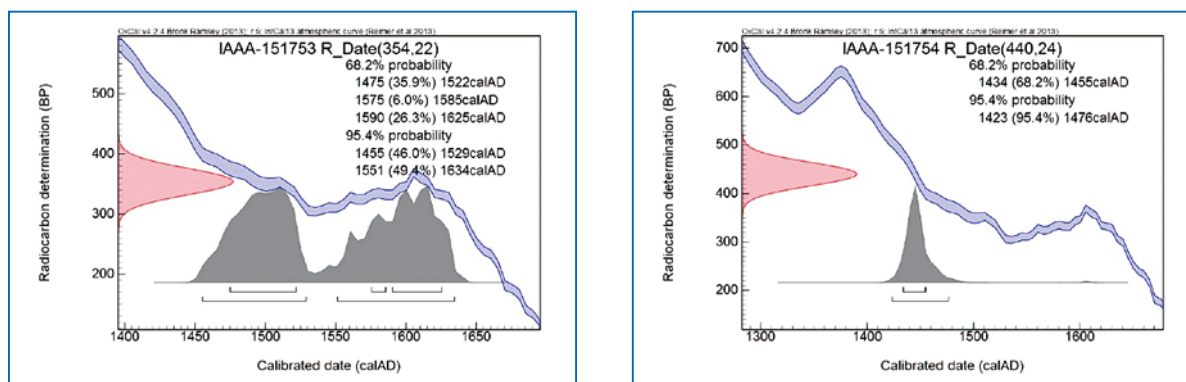
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-151753	380 \pm 20	95.41 \pm 0.25	354 \pm 22	1475calAD - 1522calAD (35.9%) 1575calAD - 1585calAD (6.0%) 1590calAD - 1625calAD (26.3%)	1455calAD - 1529calAD (46.0%) 1551calAD - 1634calAD (49.4%)
IAAA-151754	400 \pm 20	95.17 \pm 0.26	440 \pm 24	1434calAD - 1455calAD (68.2%)	1423calAD - 1476calAD (95.4%)

[参考値]

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

臼杵勲編 2007 科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代研究成果報告書, 札幌学院大学人文学部



図IV-1 暦年較正年代グラフ (参考)

2 富里3遺跡から出土した炭化種実

株式会社 パレオ・ラボ (バンダリ スダルシャン・佐々木由香)

1. はじめに

北海道厚真町字富里に位置する富里3遺跡は、厚真川左岸段丘上に立地する縄文時代とアイヌ文化期の遺跡である。ここでは、アイヌ文化期の灰集中箇所から出土した炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生について検討した。

2. 試料と方法

試料は、アイヌ文化期の灰集中(ⅢAS-1)の灰層を水洗して得られた炭化種実1試料である。

土壌の採取から水洗、種実抽出までの作業は、(公益)北海道埋蔵文化財センターによって行われた。種実は、すべて2.0mmと0.425mm目の篩を使用したフローテーション法により回収された。水洗前の土壌重量は、6200mlである。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。

3. 結果

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核とスモモ近似種炭化核の2分類群、草本植物ではハギ属炭化種子とヒエ炭化種子、アワ炭化種子の3分類群の、合計5分類群が産出された(表IV-3)。科以上の細分に必要な識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。炭化種実以外には、炭化した子嚢菌が得られた。また、未炭化の種実も得られたが、アイヌ文化期当時の生の種実は残存しないと判断したため、現生種実とした。

次に、各分類群の記載を行い、図版IV-1に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

完形ならば広卵形。壁は緻密で硬く、割れ口は鋭利である。表面に浅い溝と凹凸が不規則に入る。残存高11.4mm、残存幅5.0mm、残存厚2.9mm。

(2) スモモ近似種 cf. *Prunus salicina* Lindl. 炭化核 バラ科

いずれも破片で、完形ならば上面観はやや扁平な両凸レンズ形、側面観は紡錘形。縫合線があり、浅い溝が入る。表面は平滑。残存長6.2mm、残存幅8.8mm。大きさを復元すると、長さ12.5mm、幅10.0mm程度。破片の形状と大きさからスモモ近似種と判断した。また内面に臍部に向かう窪みをもつ破片が3片あり、いずれも大きさが異なるため、最小個体数で3点以上が含まれると推定される。

(3) ハギ属 *Lespedeza* sp. 炭化種子 マメ科

一部発泡しているが、上面観・側面観ともにいびつな楕円形。上端寄りに円形の小さい臍がある。表面は平滑。長さ2.2mm、幅1.9mm、厚さ1.5mm。

(4) ヒエ *Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz 炭化種子(穎果) イネ科

側面観は卵形ないし楕円形、断面は片凸レンズ形。厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ形。長さ1.4mm、幅1.2mm。

(5) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化種子 (穎果) イネ科

上面観は楕円形、側面観は円形に近く、先端がやや尖る場合がある。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の2/3程度。長さ1.4mm、幅1.4mm。

(6) 子囊菌 Ascomycotetes 炭化子囊

球形で、表面には微細な網目状隆線がある。長さ1.1mm、幅1.1mm。

4. 考察

アイヌ文化期の灰集中であるⅢAS-1の灰層からは、栽培植物のスモモ近似種とヒエ、アワ、野生植物で食用可能なオニグルミが得られた。オニグルミとスモモ近似種は利用されない核の部位が出土したため、利用後に不要な部分を燃やした可能性などが考えられる。ヒエとアワは食用部位である種子(穎果)が得られた。したがって、調理中などに炭化した可能性が考えられる。ハギ属の種子は利用されないため、偶発的に炭化して遺構内に堆積した可能性が考えられる。

表Ⅳ-3 富里3遺跡から出土した炭化種実(括弧内は破片数)

		試料番号
		1
		遺構名
		ⅢAS-1
		層位
		灰
		時期
		アイヌ文化期
分類群	水洗土量 (ml)	
オニグルミ	炭化核	(5)
スモモ近似種	炭化核	3* (1)
ハギ属	炭化種子	1
ヒエ	炭化種子	3
アワ	炭化種子	6
同定不能	炭化種実	(1)
子囊菌	炭化子囊	34
未炭化		
イヌタデ	果実	(1)
エノキグサ属	種子	(3)

*形状から個体数を判断



スケール 1, 2:5mm, 3-6:1mm

図版IV-1 富里3遺跡ⅢAS-1 灰層から出土した炭化種実

1. オニグルミ炭化核、2. スモモ近似種炭化核、3. ハギ属炭化種子、
4. ヒエ炭化種子、5. アワ炭化種子、6. 子囊菌炭化子囊

3 富里3遺跡出土漆器の塗膜分析

株式会社 パレオ・ラボ (竹原弘展・藤根 久・米田恭子)

1. はじめに

厚真町に所在する富里3遺跡より出土した漆器について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、W22区のⅢ層から出土した赤色の漆器1点である(表Ⅳ-4)。器種は椀とみられるが、胎部は残存していない。遺構に伴っておらず、共伴遺物がないため時期の特定は困難であるが、樽前bテフラ降下(1667年)以前のアイヌ文化期と推定されている。台部の塗膜片を少量採取し、分析試料とした(図版Ⅳ-3)。なお、分析にあたっては、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察・X線分析を行い、報告は竹原がまとめた。

表Ⅳ-4 分析対象一覧

分析No.	発掘区	出土層位	種別	器種	部位	特徴	備考	推定時期
1	W22	Ⅲ層	漆器	椀	台	全面赤色	塗膜のみ残存	樽前bテフラ降下(1667年)以前のアイヌ文化期

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜の表面部分から薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR-410、IRT-30-16を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約50 μ m前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製 JSM-5900LV)による反射電子像観察を行った。さらに、赤色塗膜層、下地層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置(同JED-2200)による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約20 μ m前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

3. 結果および考察

以下に、塗膜分析結果について述べる。なお、図Ⅳ-2の赤外吸収スペクトルは、縦軸は透過率(%T)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹);カイザー)である。また、各スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す(表Ⅳ-5)。

表Ⅳ-5 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

塗膜薄片では、下地b1層とb2層、透明漆層c1層、赤色漆層c2層が観察された（図版IV-2-1a、1b）。下地層は、b1層は布の糸の断面が観察されるため布着せ、b2層は後述のX線分析結果より土からなると考えられる。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収（吸収No.7）が認められ、漆と同定された（図IV-2）。なお、吸収No.9付近の大きな吸収は劣化に伴うゴム質の吸収である。下地b2層からは、X線分析でアルミニウム（Al₂O₃）、ケイ素（SiO₂）、鉄（Fe₂O₃）が検出されており（表IV-6）、土が使用されていたと判断される。赤色漆層c2層からは、水銀（HgO）、硫黄（SO₃）が検出され（表IV-6）、水銀朱の使用が確認された。塗膜の特徴を表IV-7に示す。

表IV-6 赤色塗膜層、下地層のX線分析結果（mass%）

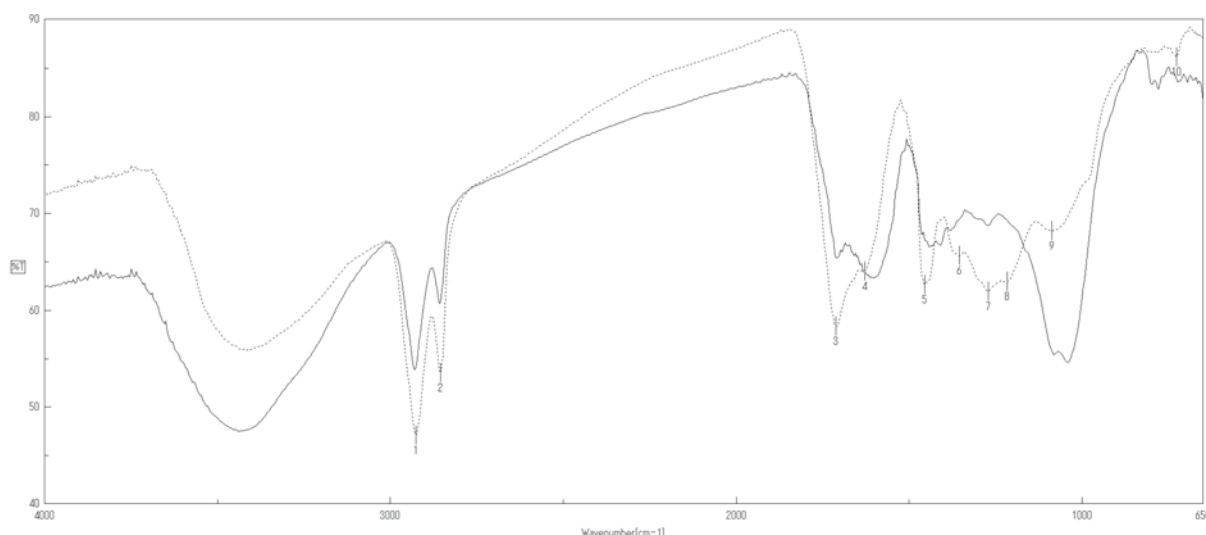
分析No.	塗膜層	C	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	Fe ₂ O ₃	HgO
1	c2層	65.89	—	4.78	10.08	—	19.26
	b2層	53.57	8.15	27.06	—	11.22	—

4. おわりに

富里3遺跡から出土した赤色漆器について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、下地は布を着せて土を塗り固め、その上に透明漆層、赤色漆層が各1層塗られる構造と考えられた。赤色漆には、水銀朱が使用されていた。

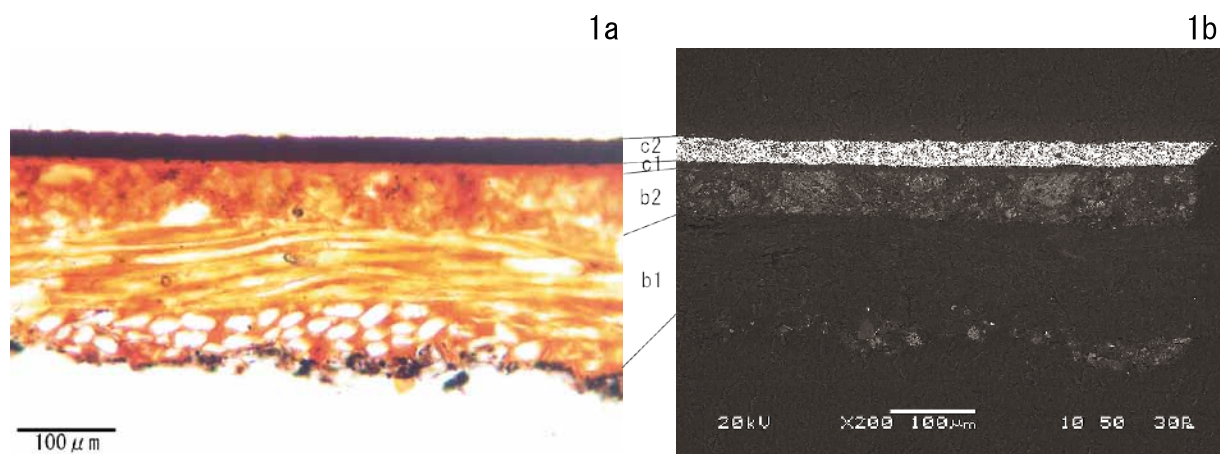
表IV-7 塗膜分析結果

分析No.	採取塗膜	下地	塗膜層	
			層数	構成
1	椀、台部赤色塗膜	布着せ+土	2層	透明漆層、赤色漆層（水銀朱）

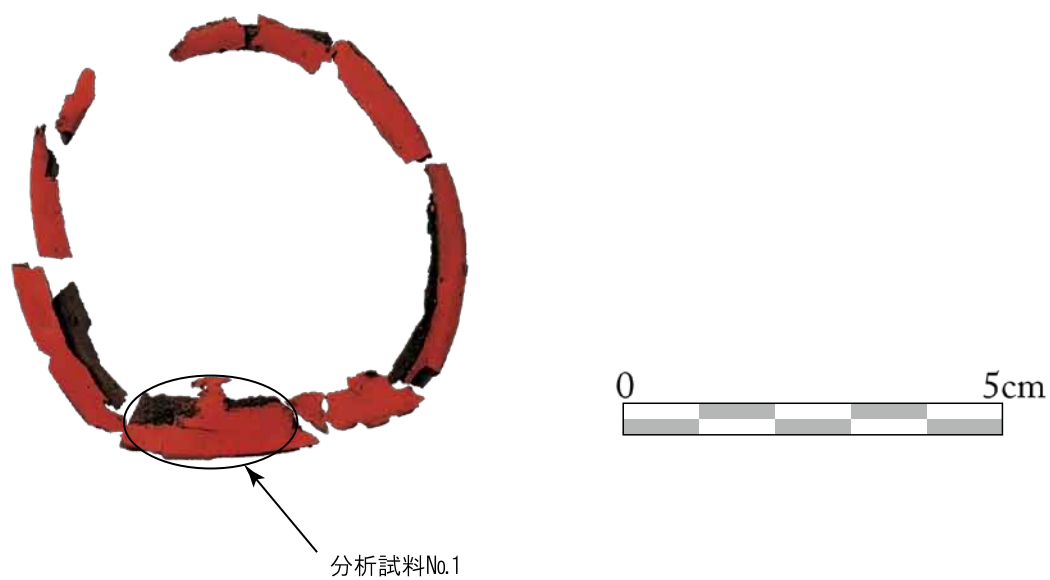


図IV-2 漆器塗膜の赤外分光スペクトル図

（実線：塗膜試料、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）



図版IV-2 漆器の塗膜構造 (a) と反射電子像 (b)



図版IV-3 分析試料採取位置

V まとめ

1 縄文時代（V層）

樽前cテフラよりも下位の黒色土（V層）からは柱穴状小土坑2基とTピット1基を検出した。これらの遺構は調査区東側にあり、V層からの出土遺物もほとんどが20ラインよりも東側で出土している。Tピットは平面小判形（楕円形）で、ほぼ長軸上に3本の杭を伴う構造である。V層出土土器には晩期中葉のものが最も多く324点、次いで中期後葉の37点、後期初頭1点となっている。石器には石鏃・石槍・石錐・スクレイパーなどの黒曜石製剥片石器のほか、砂岩のくぼみ石が多く見受けられる。

2 アイヌ文化期（Ⅲ層）

樽前cテフラよりも上位の黒色土（Ⅲ層）から灰集中1か所と漆塗椀の塗膜片が検出された。他に陶磁器片や黒曜石の剥片、砂岩の礫、獣焼骨、鉄製品などが出土しているが、Ⅲ層の多くが削平・攪乱を受けており、時期・時代の異なる遺物が混入している可能性が高い。

灰集中ⅢAS-1は唯一攪乱を免れたⅢ層の遺構である。フローテーション作業により骨角器1点のほか炭化種実が回収された。同じ時期と思われる漆椀の塗膜片も調査区北側縁で検出されている。このことから、遺跡北側の範囲外平坦面には該期の遺構・遺物が続いていると推測される。

上記フローテーション作業により回収された炭化種実は放射性炭素年代測定と同定を行った。年代測定結果は15～17世紀に相当する数値が得られた。炭化種実の同定結果はヒエ・アワの種子、オニグルミ・スモモ近似種の核などの食用植物であった。

漆椀は塗膜片分析の結果、椀に布を着せた後、土で固めた上から透明漆と赤色漆を各1回ずつ塗っていることが判明し、赤色漆には水銀朱が使用されていることがわかった。

3 I層

旧町道下の樽前bテフラよりも上位の層（I層）から、柱穴状小土坑を19基検出した。6本、4本の組み合わせで長方形、正方形に並列しているものもあり、近代の建物跡の柱の可能性もある。

ニタツナイ遺跡（厚真町2009・2010）やライカルマイ遺跡（厚真町2013）など富里地区周辺の過去の調査において、同時代（近・現代）の顕著な遺構・遺物検出の例がある。（新家）

引用・参考文献

<報告書>

厚真町教育委員会

- 2004 『厚幌1遺跡』
- 2006 『上幌内モイ遺跡(1)』
- 2007 『上幌内モイ遺跡(2)』
- 2009 『上幌内モイ遺跡(3)』
- 2009 『ニタツプナイ遺跡(1)』
- 2010 『幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタツプナイ遺跡(2)』
- 2010 『厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)』
- 2011 『オニキシベ2遺跡』
- 2013 『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡』
- 2013 『オニキシベ5遺跡』
- 2013 『ライカルマイ遺跡』
- 2014 『オニキシベ4遺跡』
- 2014 『オニキシベ6遺跡』
- 2014 『厚幌1遺跡(3)』
- 2014 『ヲチャラセナイ遺跡』
- 2014 『ショロマ3遺跡』
- 2015 『ショロマ1遺跡(1)』
- 2015 『ショロマ2遺跡』

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

- 2013 調査年報 25
- 2014 調査年報 26
- 2015 調査年報 27
- 2015 『厚真町 朝日遺跡』北埋調報 313

<論文・その他書籍等(年代順)>

- 更科源蔵 1955 『熊祭 IOMANTE』北方文化写真シリーズ1 楡書房
- 厚真村 1956 『厚真村史』
- 厚真村郷土研究会・厚真村教育委員会 1956 『厚真村古代史』
- 松野久也・石田正夫 1960 『5万分の一地質図幅「早来」および同説明書』北海道開発庁
- 池田実・亀井喜久太郎 1976 『厚真の旧地名を訪ねて』
- 池田実・亀井喜久太郎 1978 『続厚真の旧地名を訪ねて』
- 松浦武四郎 秋葉実 解説 高倉新一郎 校訂 1985 「戊午 東部 安都麻志 全」
『戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌／松浦武四郎 中』北海道出版企画センター
- 小山正忠・竹原秀雄 2004 『新版 標準土色帖』
- 小林達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』
- 清水香 2015 「アイヌ文化期における漆塗椀の基礎的研究」『物質文化』95 物質文化研究会
- 関根達人 2012 「北海道晩期縄文土器編年の再構築」『北海道考古学』第48輯 北海道考古学会

写真図版



Ⅲ層上面 確認 西から



旧河道跡 完掘 南東から



Ⅴ層上面 確認 西から



完掘 西から

図版 2



ⅢAS-1 土層断面 西から



Ⅲ層上面 漆椀 南から



Ⅲ層上面 柱穴(IKP)確認 南から



遺跡周辺環境 南西から



I KP-1 土層断面 南東から



I KP-2 土層断面 北東から



I KP-3 土層断面 南東から



I KP-4 土層断面 南東から



I KP-5 土層断面 南西から



I KP-6 土層断面 南西から



I KP-7 土層断面 東から



I KP-8 土層断面 南から



I KP-9 土層断面 南東から



I KP-10 土層断面 南から



I KP-11 土層断面 南西から



I KP-12 土層断面 南西から

図版 4



IKP-13 土層断面 南西から



IKP-14 土層断面 南西から



IKP-15 土層断面 南西から



IKP-16 土層断面 南西から



IKP-17 土層断面 南西から



IKP-18 土層断面 南西から



IKP-19 土層断面 西から



IKP群 完掘 南西から



I 層上面 カワシンジュガイ 南から



TP-1 土層断面 南西から



TP-1 完掘 南西から



TP-1 KP-1



TP-1 KP-2・3 西から



TP-1 KP-1~3 完掘 北西から



VKP-1 土層断面 東から



VKP-2 土層断面 西から



V 層遺物 東から



V層遺物 北から



調査風景 南東から



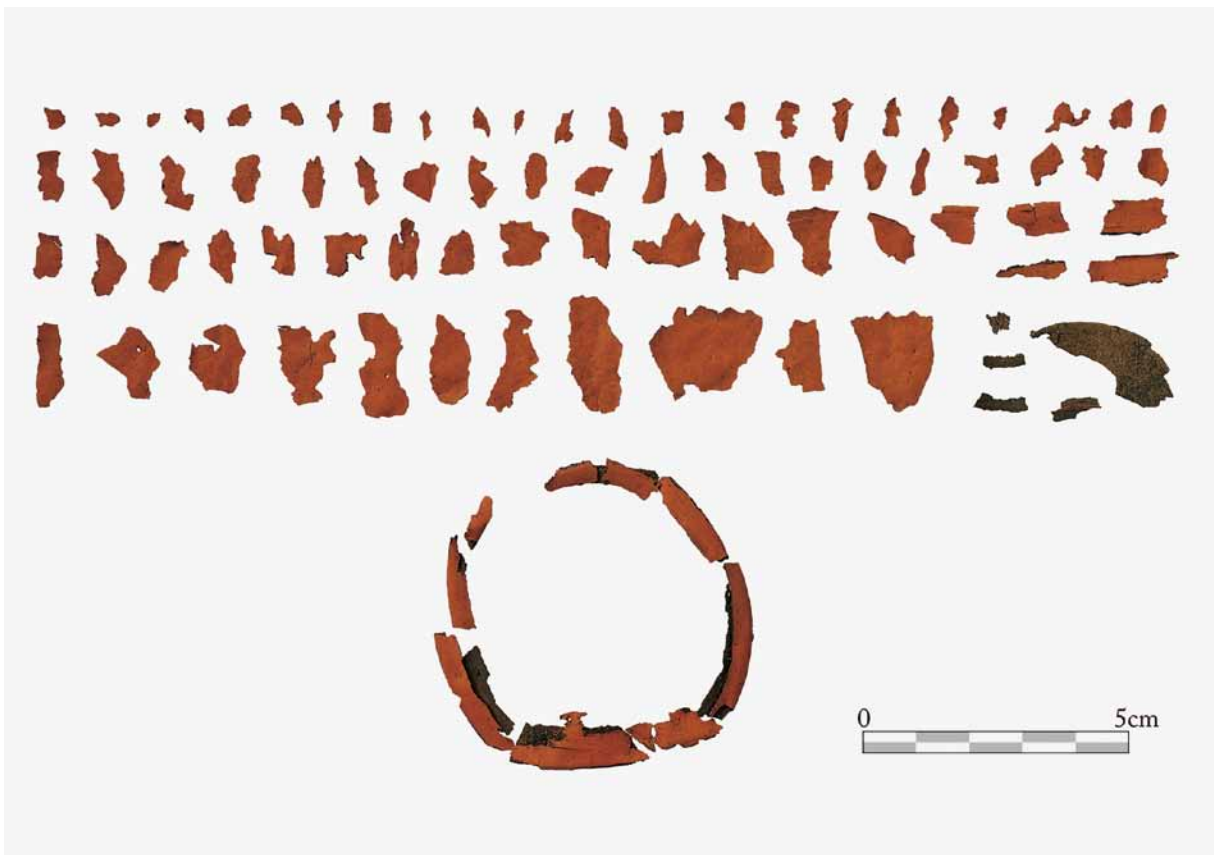
基本土層 南東から



崖面土層 東から



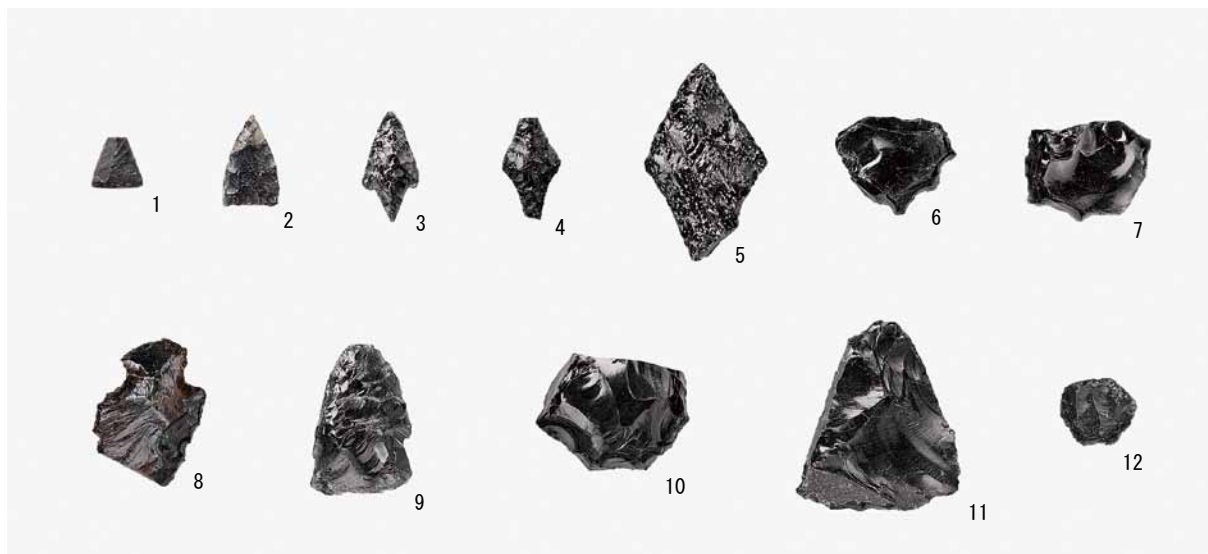
1. III AS-1出土の骨角器



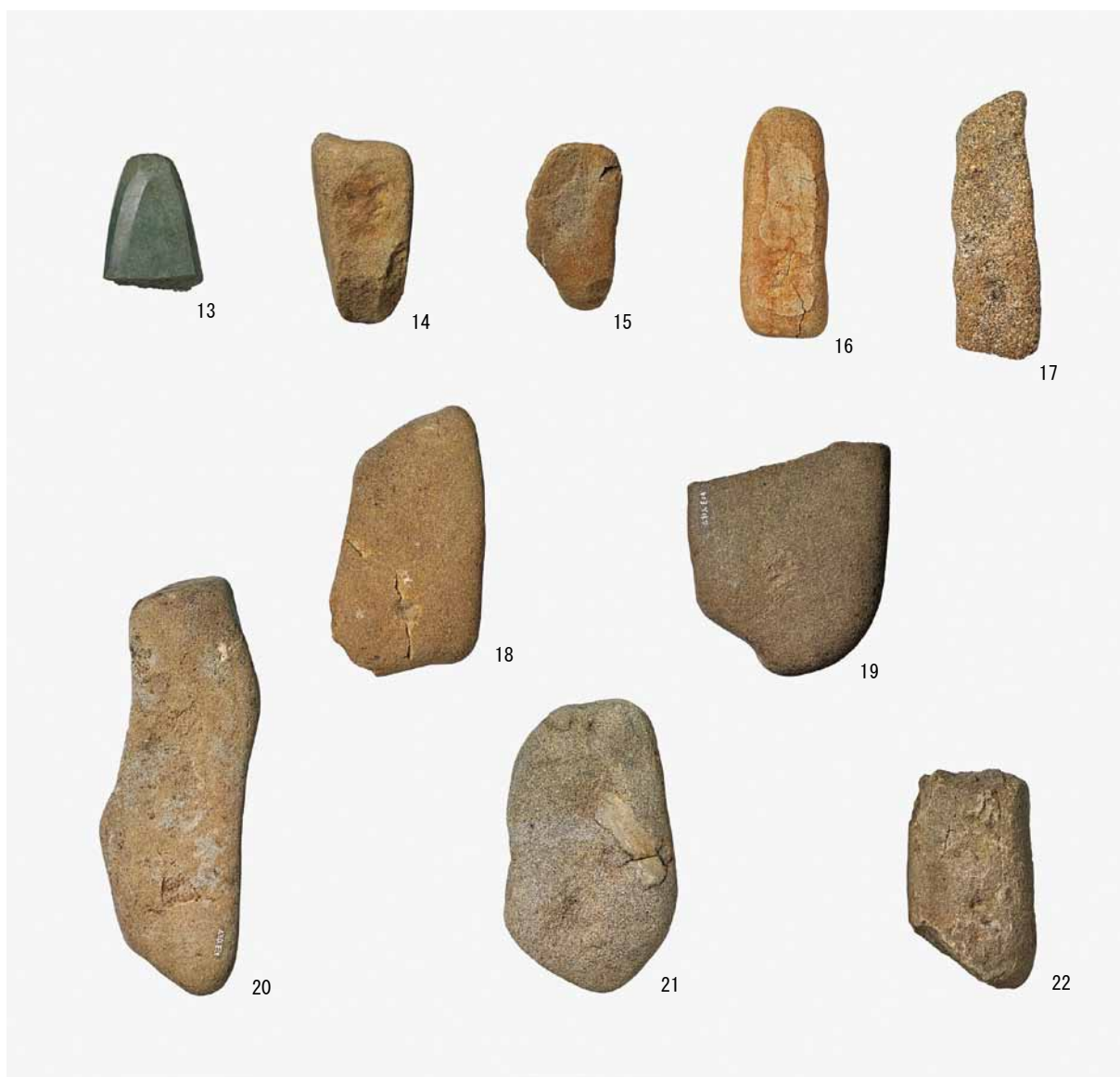
2. III層出土の漆椀塗膜片



1. 包含層出土土器



1. 包含層出土石器 (1)



2. 包含層出土石器 (2)

報告書抄録

ふりがな	あつまちょう とみさとさんいせき							
書名	厚真町 富里3遺跡							
副書名	勇払東部(二期)地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第326集							
編著者名	村田 大・中山昭大・新家水奈・阿部明義							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地 1 TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238 E-mail mail@domaibun.or.jp ホームページ http://www.domaibun.or.jp							
発行年月日	平成28(西暦2016)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	(Y18)				
とみさと 富里3遺跡	ほっかいどうゆうふつぐん 北海道勇払郡 あつまちようあざとみさと 厚真町字富里 322-3~5、 325-11	01371	(J-13-) 133	42° 45' 23"	141° 55' 30"	20150512 ~ 20150612	303㎡	厚幌導水路 工事に伴う 事前調査
種別	遺物包含地							
主な時代	縄文時代中期後半、晩期中葉、アイヌ文化期							
主な遺構	灰集中1か所、柱穴状小土坑2基、Tピット1基							
主な遺物	アイヌ文化期の漆碗塗膜片、骨角器、縄文時代晩期の土器・石器等							
要 約								
<p>富里3遺跡は、勇払郡厚真町市街地から北東へ約5km、厚真川左岸の段丘上に位置する。標高は約32mである。同じ段丘上の約500m西には富里2遺跡、約700m南南東にはニタップナイ遺跡がある。</p> <p>樽前cテフラより上位の包含層(Ⅲ層)は多くが削平されていたが、調査区北側際でアイヌ文化期のものと思われる灰集中1か所と漆碗の塗膜片が出土した。このほか包含層からは礫等が出土している。</p> <p>樽前cテフラより下位(V層)では、旧河道による攪乱や水成堆積がみられた。遺構は柱穴状小土坑2基、Tピット1基である。</p> <p>総遺物点数は縄文土器片416点(うち晩期372点)、石器411点、礫・礫片394点、計1,221点である。また近・現代のものと思われる柱穴状小土坑19基を記録した。</p>								

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第326集

厚真町 富里3遺跡

— 勇払東部(二期)地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成28(2016)年3月25日 発行

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
E-mail mail@domaibun.or.jp
URL <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 株式会社 須田製版
〒063-8603 札幌市西区二十四軒2条6丁目1番8号
TEL (011) 621-1000(代表) FAX (011) 621-1500

